

佐賀大学美術館

SUAM

THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM

平成26年度

年報十紀要
2014

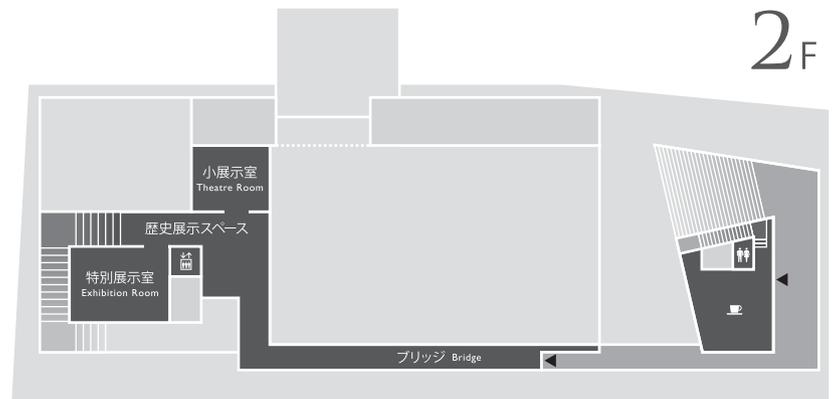
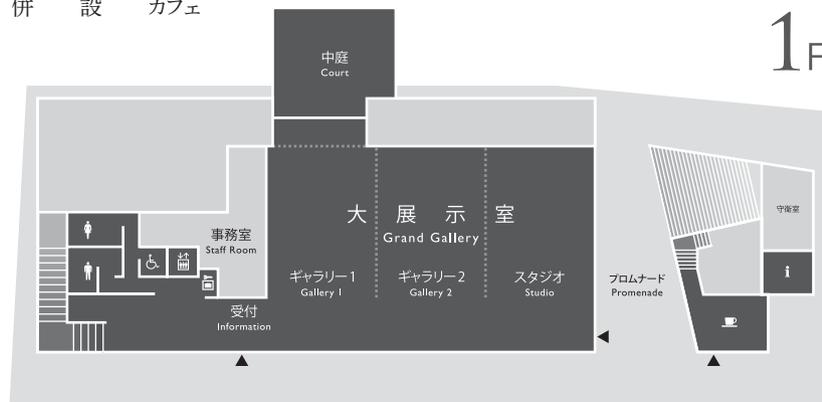


〔館概要〕

名 称	佐賀大学美術館
所 在 地	佐賀市本庄町1番地
基本設計	佐賀大学
実施設計	(株)梓設計九州支社 (協力: (株)ワークヴィジョンズ)
監 理	佐賀大学環境施設部
施 工	(建築) 金子建設(株) (電気) (株)佐電工 (機械) (株)九電工
構 造	鉄骨造・地上2階建
延床面積*	1,502㎡
展示面積*	462㎡ 展示室1 106㎡ 展示室2 106㎡ スタジオ 111㎡ 特別展示室 48㎡ 小展示室 34㎡ 歴史展示スペース 57㎡

*最終図面にに基づき、数値を修正

そ の 他	プロムナード 中庭 ブリッジ
設 備	トイレ 多目的トイレ ロッカー
併 設	カフェ



〔沿革〕

平成23年 1月 4日	学長年頭挨拶で美術館設置計画を発表
平成23年 6月 8日	佐賀大学役員会にて美術館設置諮問委員会からの答申書を報告。美術館の設置を審議・了承
平成23年12月20日	美術館基本設計建設コンサルタント選定委員会で基本設計コンサルタント選定
平成24年 2月22日	佐賀大学役員会にて基本設計のイメージを説明、募金趣意書の作成を提案・了承
平成24年 5月14日	基本設計納入
平成24年12月29日	美術館実施設計終了
平成25年 2月14日	新営工事起工式
平成25年 6月26日	美術館規則、美術館運営委員会規定制定
平成25年 8月30日	美術館建設工事竣工
平成25年 9月28日	佐賀大学統合10周年記念式典・佐賀大学美術館開館記念式典
平成25年10月 2日	一般公開開始
平成26年10月24日	入館者 5万人達成
平成26年度	第18回佐賀市景観賞受賞

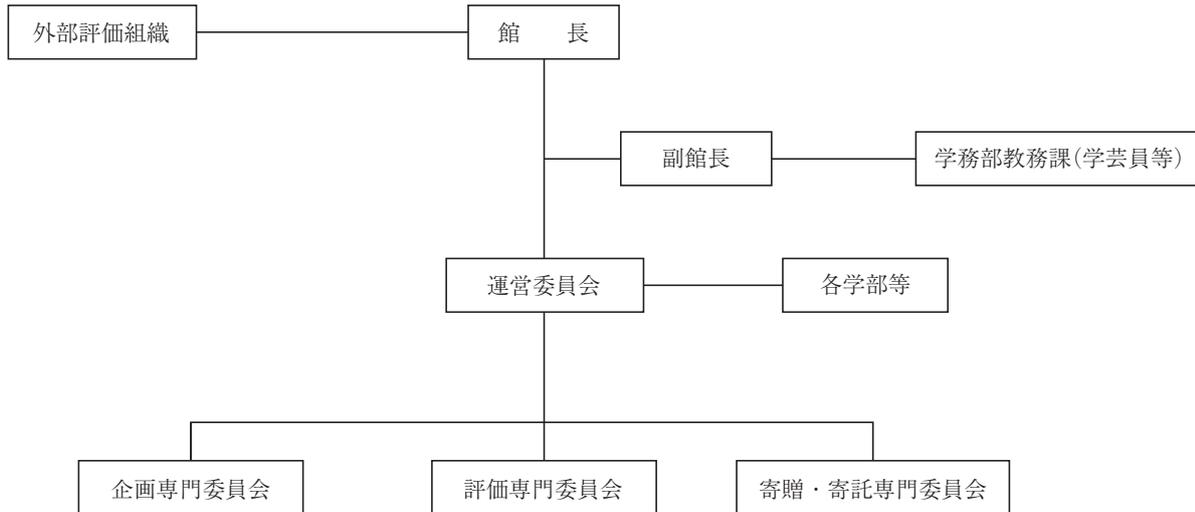
〔設立主旨〕

平成25年10月、旧佐賀大学と佐賀医科大学の統合10周年記念事業として佐賀大学美術館は誕生しました。美術館と、併せて整備された正門エリアは、「地域に開かれた大学」という佐賀大学の理念を象徴するものです。美術館は、総合大学である佐賀大学の魅力を多方面に向けて、より多くの人に知っていただくための情報発信源として活用されています。

〔活動目的〕

佐賀大学が所有する資料や、美術・工芸に関連する作品を収集・保管・展示するとともに、文化芸術の新しい活動や表現を地域の方々とともに作り上げ、総合大学が生み出すさまざまな研究成果を周知・公開していきます。

〔組織図〕



〔職員〕

館長	宮崎 耕治
副館長	吉住 磨子
主任(学芸員)	佐々木 奈美子
事務員(再雇用)	西村 彰
事務補佐員(学芸員)	上田 香苗
事務補佐員(学芸員)	大塚 麻理子
事務補佐員(学芸員)	大坪 由季
事務補佐員(学芸員)	鳥越 須実子
	(~平成26年8月31日)
事務補佐員	井手 麻奈未
	(平成26年11月1日~)
事務補佐員(学芸員)	鬼塚 美津子
	(平成26年11月20日~)
平成27年3月31日現在	

〔運営委員会委員〕

委員長(館長)	理事	宮崎 耕治
副委員長(副館長)	教授	吉住 磨子
委員	教授	重藤 輝行
委員	教授	中村 博和
委員	准教授	永松 美雪
委員	准教授	後藤 隆太郎
委員	教授	有馬 進
委員	学務部長	安倍 武司
委員	佐賀大学 同窓会顧問	宮島 豊秀
委員	教授	田中 嘉生
委員	教授	田中 右紀
平成27年3月31日現在		

目次

[年報]

3 ——— 館概要

4 ——— 沿革

5 ——— 組織図

7 ——— 平成26年度の活動

1. 展示記録（主催）
2. 展示記録（企画申請）
3. 実習・研修
4. 刊行・掲載・見学
5. 寄附
6. 職員の館外調査研究・研修等
7. 入館者一覧表
8. 新収蔵作品
9. 作品修復・作品貸出等

[紀要]

44 ——— 展覧会「石本秀雄のアトリエ」一室内画の展開と美術教育の理念
佐々木奈美子（佐賀大学美術館学芸員）

〔平成26年度の活動〕

- 平成26年 3月28日 正門脇に祭事告知用外看板設置
- 5月2日 入館者3万人達成
- 7月25日 「芸術と経済—アートとお金の意外な関係」(～8.24)
- 9月19日 「開館1周年記念—海老原喜之助」(～11.9)
- 9月19日 「シリーズ美術・工芸—小木曾誠・徳安和博」(～9.26)
- 10月24日 入館者5万人達成
- 10月26日 佐賀大学公開講座「世界の芸術文化」(2回目11.1/3回目11.15)
- 11月21日 「佐賀大学所蔵—秘めたる名品展」(～12.7/1.17～3.15)
- 12月13日 「医学のあけぼのから先端医療まで」(～1.12)
- 平成27年 1月17日 「佐賀大学特別支援学校高等部—がんばるわたしたちの木版画展」(～1.29)
- 1月22日 第18回佐賀市景観賞表彰式・佐賀市景観重要建造物指定書授与式
- 1月22日 「景観啓発パネル展」(～1.29)
- 3月19日 ブロンズ像《雷》(成富宏 作)の鑄造・設置
- 3月20日 「染めの系譜—Jo-Ogawa-Tanaka 染色教室三人展」(～5.10)
- 3月20日 「バンカラ時代の佐賀大学—昔なつかしキャンパスライフ」(～5.31)

1. 展示記録（主催）

特美の創始者 石本秀雄のアトリエ

《展覧会概要》

佐賀大学「特設美術科」を創設した立役者、石本秀雄（1908-86）。九州一円の美術教師の育成に力を注いだ教育者として、また、日展や東光会展を舞台に創作を重ねた作家として大きな影響力を持っていた石本の人間的な魅力にスポットをあて、その室内画・人物画を紹介。

《会期》平成26（2014）年3月20日（木）～5月6日（火）

《開館日数》42日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀大学美術館

《入館者数》4,518名

《広報物》チラシ、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、目録

《関連事業》

ギャラリートーク（時間はすべて14:00～）

日程：4月6日（日）

演題：「厳しさと優しさ～本展覧会の見どころ」

講師：佐々木奈美子（当館学芸員）

日程：4月13日（日）

演題：「石本先生の作品と思い出」

講師：金子剛氏（東光会常任審査員）

日程：4月20日（日）

演題：「<石本秀雄展>に見る展示の移り変わり」

講師：上田香苗（当館学芸員）

日程：4月27日（日）

演題：「石本秀雄と佐賀県の図画教員について」

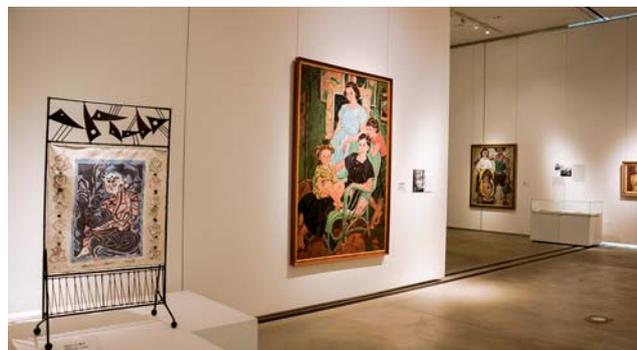
講師：野中耕介氏（佐賀県立博物館・美術館学芸員）



チラシ



ギャラリートーク



作品リスト

作家名	作品名	制作年	所蔵	紀要参照頁	
石本秀雄	自画像	1929	岡田家	p.44	
石本秀雄	室内小憩	1936	佐賀県立美術館	p.45	
石本秀雄	籐椅子に凭る女	1936	佐賀県立美術館	p.45	
石本秀雄	秋	1938	佐賀県立美術館	p.46	
石本秀雄	庭と少女	1948	佐賀県立美術館	p.47	
石本秀雄	画室	1949	佐賀県立美術館	p.47	
石本秀雄	白い服の少女	1950	佐賀大学	p.49	
石本秀雄	画室にて	1951	佐賀大学	p.49	
石本秀雄	画家の家族	1951	佐賀県立美術館	p.50	
石本秀雄	裸婦を描く	1952	佐賀県立美術館	p.51	
石本秀雄	裸婦	不詳	岡田家		
石本秀雄	画学生の像	1953	佐賀県立美術館	p.51	
石本秀雄	晩夏	1953	佐賀県立美術館	p.53	
石本秀雄	オーバーの女	1960	岡田家	p.53	
石本秀雄	女二人	1962	佐賀県立美術館	p.54	
石本秀雄	K子座像	1968	佐賀県立美術館	p.54	
石本秀雄	初秋の女	1969	岡田家	p.55	
	スクリーン(衝立)				
	石本秀雄加筆風呂敷(棟方志功図案)	1960年前後	岡田家		
	中牟田佳彰作フレーム				
石本秀雄	パリのモデル	素描	1964頃	岡田家	p.55
石本秀雄	TK(タキ夫人)	素描	1974	岡田家	

* スクリーンと素描 2点以外は油彩・キャンバス

経済学部50周年記念事業 芸術と経済—アートとお金の意外な関係

《展覧会概要》

「芸術」と「経済」をめぐる関係に着目し、通貨の成り立ちから貨幣の芸術性、オークションの仕組み、流通や交易など様々な角度から紹介。経済学部50周年記念事業の一環として、学部と大学美術館が共同で企画・運営にあたり、会期中には学内「来てみんしゃい！佐賀大学へ」の協力による2本の講演会をはじめ各種イベントを行い、終了後には報告書を作成した。

《会期》平成26(2014)年7月25日(金)～8月24日(日)

《開館日数》24日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、特別展示室

《主催》佐賀大学美術館/佐賀大学経済学部

《協力》森田孝志氏/佐賀大学地域学歴史文化研究センター

《資料提供等》佐賀県立九州陶磁文化館、佐賀県立名護屋城博物館、佐賀県立博物館、ハウステンボス美術館、住友史料館、日本銀行、日本銀行金融研究所貨幣博物館、佐賀大学eラーニングスタジオ、佐賀大学附属図書館、山本進氏、伊藤昭弘氏、山崎功氏

《展示構成》第I章—The money—貨幣経済のなりたちと役割

第II章—What's the value—お金・もの・芸術

第III章—Circulation—循環する経済と芸術

ビデオ—経済学部教員によるワンポイント解説

《入館者数》4,031名

《広報物》ポスター、チラシ、イベントチラシ、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、イベントチラシ、パンフレット、報告書(パンフレット、報告書はp.35参照)

《関連事業1》講演会①

講演会②

日時：7月25日(金) 13:00～

日時：8月21日(木) 15:00～

演題：「ミュージアムが地域経済を変える」

演題：「アートを巡る経済学」

講師：蓑豊氏(兵庫県立美術館館長)

講師：辛美沙氏(ギャラリスト、アートアドバイザー、MISA SHIN GALLERY 代表)

会場：大学会館2階多目的ホール

会場：佐賀大学経済学部4号館2階5番教室

内容：蓑豊氏の講演は、MUSEUMが地域に及ぼす影響について、シカゴ美術館等海外での勤務経験や、初代館長を勤めた金沢21世紀美術館の実践例などからわかりやすく解説。辛美沙氏の講演は、ARTISTとMUSEUMとMARKETの関係、ビエンナーレとアートフェアの相違と相関関係など、豊富な現場体験に基づく刺激的なテーマだった。

《関連事業2》リレーギャラリートーク

日程：8月9日(土)

時間：10:00～芸術と経済—展覧会のみどころ/佐々木奈美子(当館学芸員)

11:00～村のコレクター/伊藤昭弘氏(佐賀大学地域学歴史文化研究センター准教授)

13:00～海を渡る陶磁器/藤原友子氏(佐賀県立九州陶磁文化館学芸員)

14:00～古銭にまつわるエトセトラ/森田孝志氏(佐賀県教育庁文化財課参事)

15:00～オークションと価格/中村博和氏(佐賀大学経済学部教授)

16:00～肥前磁器の楽しみ/上田香苗(当館学芸員)

《関連事業3》コインデザインワークショップ

日時：8月10日(日) 13:00～

講師：荒木博申氏(佐賀大学文化教育学部教授)

内容：佐賀大学でデザインを担当する教員の指導で、デザインのイロハを学びながらコインの図案制作を行った。



チラシ



ビデオコーナー

ビデオ上映 経済学部教員によるワンポイント解説

1	美術品の会計学	5分	小川哲彦 准教授
2	近代日本の陶磁器産業	6分	金子晋右 准教授
3	需要と供給、オークション	6分	中村博和 教授
4	お金の役割	8分	伊藤正哉 准教授
5	お金の犯罪	6分	内山真由美 准教授

制作:佐賀大学 e-ラーニングスタジオ



リレーギャラリートーク



コインデザインワークショップ

【シリーズ美術・工芸】 小木曾誠・徳安和博—飛翔する夢・森の中

《展覧会概要》

文化教育学部美術・工芸教室の教員2名の絵画と彫刻を紹介。わずか7日間の会期だったが、油彩画の公開制作の実施や、彫刻の制作過程を映像で流した他、展示スペースの左右で全く異なる世界が広がるような斬新な展示を試みた。

《会期》平成26(2014)年9月19日(金)～9月26日(金)

《開館日数》7日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀大学美術館

《入館者数》1,421名

《広報物》外看板、HP、FB(展示映像も一部公開)

《配布資料》パンフレット(P.35参照、生協を通じて販売:200円)

《関連事業》

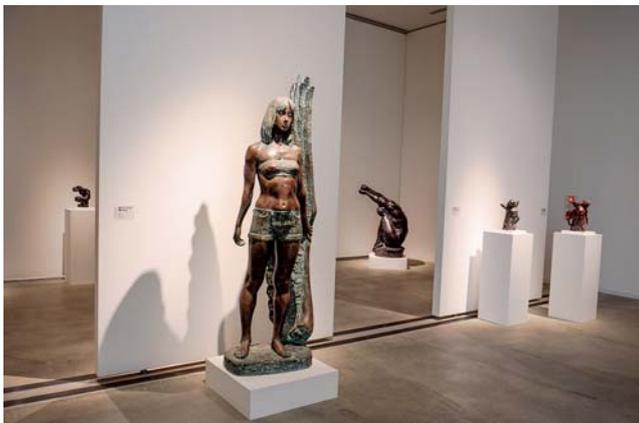
ギャラリートーク

日程:9月20日(土)

時間:14:00～小木曾誠(佐賀大学文化教育学部准教授)

15:30～徳安和博(佐賀大学文化教育学部准教授)

内容:出品作家によるギャラリートーク。それぞれの作品の前で、見どころなどを解説し、多くの参加者があった。



作品リスト

作家名	作品名	制作年	所蔵
小木曾誠	セビリア	2006	個人蔵
小木曾誠	蓮連たる楠	2007	
小木曾誠	ブリビツェ	2009	
小木曾誠	流れ	2009	
小木曾誠	柔脆な共存	2010	
小木曾誠	ボマッツォ	2010	個人蔵
小木曾誠	フィレンツェ	2011	個人蔵
小木曾誠	ドロヴニク	2013	個人蔵
小木曾誠	桜の光の中に	2014	
徳安和博	飛び立つ日を夢みる女	2002	
徳安和博	Shin	2002	
徳安和博	Shin (マケット)	2002	
徳安和博	母と子	2008	
徳安和博	母と子 (マケット)	2008	
徳安和博	決意	2009	
徳安和博	始動	2012	
徳安和博	始動 (マケット)	2012	
徳安和博	月の奇跡	2013	
徳安和博	月の奇跡 (マケット)	2013	
徳安和博	朝におもい夕べにおもう	2013	長崎県立島原工業高校蔵
徳安和博	朝におもい夕べにおもう (マケット)	2013	
徳安和博	朝におもい夕べにおもう (マケット)	2013	

開館1周年記念 【所蔵品紹介】海老原喜之助

《展覧会概要》

本展を皮切りに、2階特別展示室にて大学所蔵品の順次公開を開始。

県立美術館に寄託扱いとなっている海老原喜之助の油彩画《衣を与う》を、学内に保管されていたリトグラフ等とともに紹介。本展示に際して行った油彩画《衣を与う》の修復経緯についても、パネルで紹介した。(修復についてはP.42参照)

《会期》平成26(2014)年9月19日(金)～11月9日(日)

《開館日数》45日間

《会場》特別展示室

《主催》佐賀大学美術館

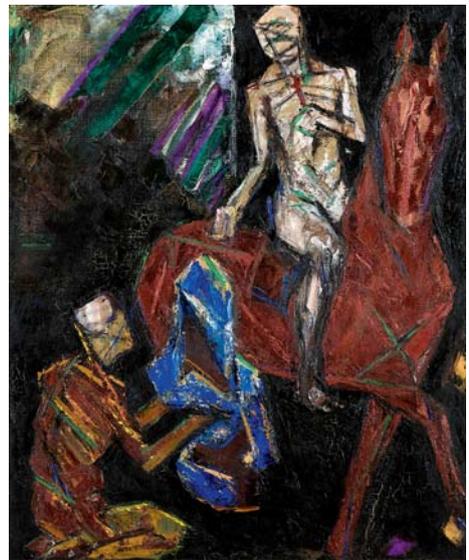
《観覧者数》2,444名

《広報物》外看板、HP、FB

《配布資料》目録

作品リスト

作家名	作品名		制作年
海老原喜之助	衣を与う	油彩・キャンバス	1956
海老原喜之助	人物	素描	不詳
海老原喜之助	蝶	リトグラフ	1956
海老原喜之助	本を焼く人	リトグラフ	1956
海老原喜之助	記念碑的像	リトグラフ	1956



《衣を与う》
1956



佐賀大学公開講座 「世界の芸術文化 第一回：近現代ドイツの芸術運動」

《展覧会概要》

文化教育学部複数の研究室が分野をまたいで行ってきた世界の芸術文化に関する公開講座を共催。今回は近現代のドイツの芸術運動をメインテーマに3回の講座を開講。揺れ動く時代の中で、ドイツの芸術家たちは何を考え、どのような作品を生み出してきたのかを受講生と共に考える内容となった。

《会期》平成26(2014)年10月26日(日)、11月1日(土)、11月15日(土)

《開館日数》3日間

《主催》佐賀大学文化教育学部(欧米文化・西洋美術史研究室) / 佐賀大学美術館

《構成》

- ・第1回「私たちの生活を変えたバウハウス・デザイン」
講師：古賀徹氏(九州大学芸術工学府准教授)
日程：10月26日(日)
時間：14:00～15:30
会場：佐賀大学美術館1階スタジオ
- ・第2回「時間芸術と空間芸術ーレッシング芸術論の現代的意義」
講師：後藤正英氏(佐賀大学文化教育学部准教授)
日程：11月1日(土)
時間：14:00～15:30
会場：文化教育学部1号館2階102教室
- ・第3回「苦難の時代を生きるーナチス台頭期のドイツの芸術家たち」
講師：佐々木奈美子(当館学芸員)
日程：11月15日(土)
時間：14:00～15:30
会場：文化教育学部1号館2階102教室

《参加者数》第1回36名 / 第2回45名 / 第3回22名

《広報物》ポスター、チラシ

《配布資料》各回レジュメ



チラシ



第1回



第2回



第3回

佐賀大学所蔵 秘めたる名品展

《展覧会概要》

30年以上県立美術館に寄託扱いとなっている佐賀大学所蔵の作品7点の内、今年度すでに公開した石本秀雄、海老原喜之助を除く5点を紹介した。調査の過程で明らかとなった額裏のラベルをパネルにて紹介したり、あえて額をはずす等、工夫のある展示を行った。

《会期》平成26(2014)年11月21日(金)～12月7日(日)

平成27(2015)年1月17日(土)～3月15日(日)

《開館日数》65日間

《会場》特別展示室

《主催》佐賀大学美術館

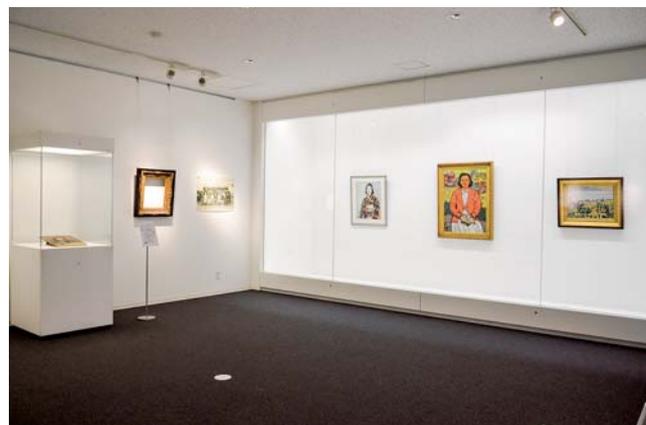
《観覧者数》3,819名

《広報物》ポスター、チラシ、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、目録



チラシ



作家名	作品名	制作年
藤島武二	台湾娘	不詳
岡田三郎助	若き娘の顔	1913
辻永	須磨初秋	不詳
斎藤与里	婦人像	不詳
中西利雄	H嬢像	水彩 1943

* 水彩 1 点以外は油彩・キャンバス



辻永〈須磨初秋〉



藤島武二〈台湾娘〉



斎藤与里〈婦人像〉



岡田三郎助〈若き娘の顔〉



中西利雄〈H嬢像〉

がんばるわたしたちの木版画展—佐賀大学特別支援学校高等部

《展覧会概要》

文化教育学部附属特別支援学校高等部の木版画カレンダー制作の取り組みを紹介。

生徒たちが毎年5月からコツコツと作業を続けて完成させる木版画の手作りカレンダーについて、過去の原画や版木、最新作などを展示した。本学で書道を学ぶ学生と共に挑戦した書のパフォーマンスの様子も映像で紹介。

《会期》平成27(2015)年1月17日(土)～1月29日(木)

《開館日数》11日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2

《主催》佐賀大学美術館 / 佐賀大学文化教育学部附属特別支援学校

《協力》佐賀大学文化教育学部学校教育課程 教科教育選修国語(書写)分野

《展示構成》

版画18点、版木2点、原画22点、カレンダー4点、書3点、
映像1点の計50点と生徒による木工・手工品

《入館者数》1,145名

《広報物》ポスター、チラシ、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ

《関連事業》

書のパフォーマンスとワークショップ

日程：12月19日(金)

時間：13:00～

内容：本学の学生が展覧会の題辞を書くパフォーマンスを見て、特別支援学校の生徒たちが、大筆を持って初めての一字書に挑戦した。

はんがワークショップ

日程：1月25日(日)

時間：13:30～15:30

内容：木版のすり体験、消しゴムはんこの彫り体験を行った。

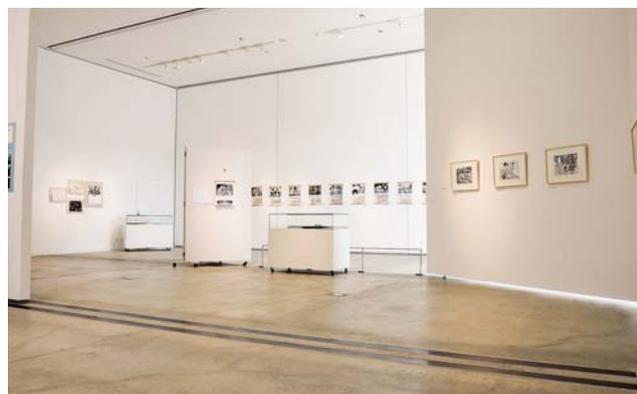
すり体験では、特別支援学校の生徒が彫った版木を使用し、カレンダーの台紙にすった。彫り体験では、彫刻刀を使い消しゴムを彫って自分だけのオリジナルスタンプを作った。



チラシ



書のパフォーマンスとワークショップ





はんがワークショップ



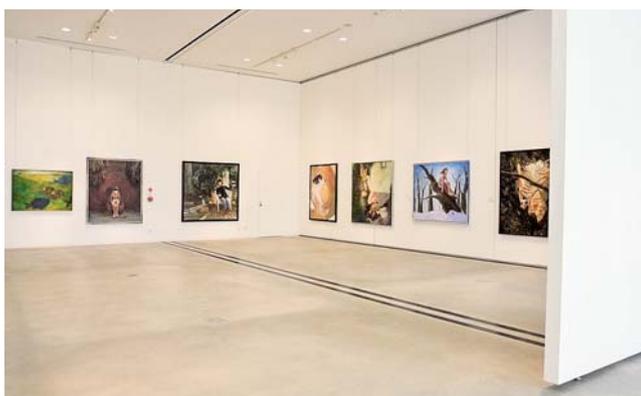
はんがワークショップ

2. 展示記録（企画申請）

第5回 A DOMANI 展

佐賀大学美術・工芸課程で西洋画を学ぶ在校生32名と卒業生による作品約45点を展示。5回目となる今回より会場を佐賀大学美術館に移して開催した。

《会期》平成26(2014)年5月14日(水)～5月25日(日)
《開館日数》11日間 《会場》ギャラリー1、ギャラリー2
《主催》佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程(西洋画専攻)



日本折紙学会 折紙探偵団・友の会九州展

折紙探偵団・九州友の会主催で、メンバーの作品の他、国内外の折紙作家・愛好家によるハイクオリティな作品群を展示。精緻な生き物造形やスタイリッシュな幾何学造形が並び、多くの来館者でにぎわった。

《会期》平成26(2014)年5月14日(水)～5月25日(日)
《開館日数》11日間 《会場》スタジオ
《主催》折紙探偵団・友の会九州



体験！ 富士町古湯映画祭—第31回古湯映画祭イベント

古湯映画祭を佐賀大学美術館で紹介。映画祭のイベントとして、貴重な映像、写真、関係者からの手紙など、これまで古湯映画祭30年を振り返る機会となった。

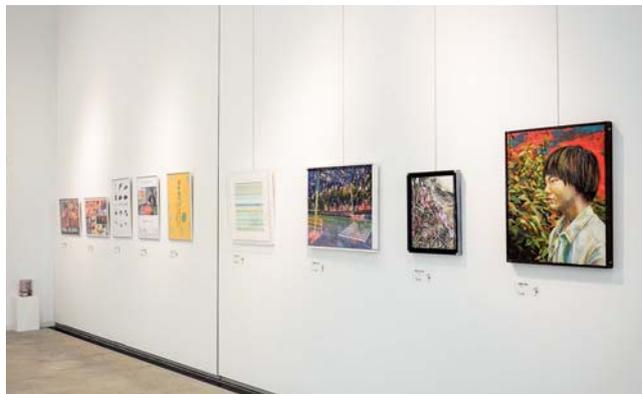


《会期》平成26(2014)年6月3日(火)～6月8日(日)
《開館日数》6日間 《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
《主催》富士町古湯映画祭実行委員会



九州地区大学美術科 8 BOXes 展

九州管内の教員養成系大学美術科は、それぞれ立地条件、歴史、規模、カリキュラム等が異なり、地域文化を反映した特色がある。学生の日頃の研究の成果を、各大学の美術科が同じサイズの箱に入れて佐賀大学美術館に送り、一堂に展示した。



《会期》平成26(2014)年6月18日(水)～6月29日(日)
《開館日数》11日間 《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
《主催》日本教育大学協会九州地区美術部門



デッサンの前と後ろ—美術・工芸講座の授業風景

佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程の素描の授業を美術館で行った。1年生を中心に院生や教員も含む約35人が石膏デッサンに取り組み、普通は見ることのできない制作過程や最終日の公開講習会を一般にも公開した。



《会期》平成26(2014)年7月3日(木)～7月18日(金)
《開館日数》14日間 《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
《主催》佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程



第37回 二紀会佐賀支部

佐賀支部メンバー28人が水彩、油彩独特の色彩や迫力のある大型の作品を展示。また、二紀会理事による批評会や講演会も開催された。

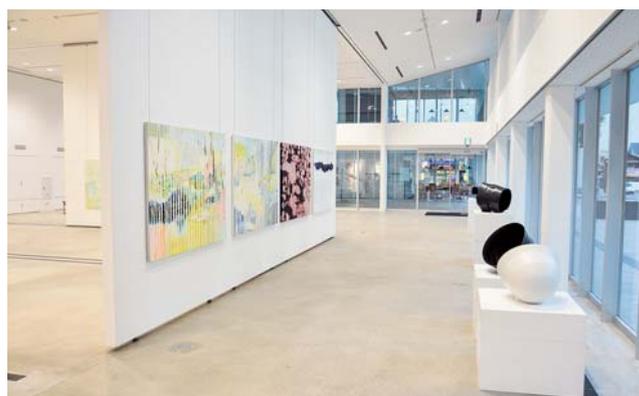
《会期》平成26(2014)年9月3日(水)～9月7日(日)
《開館日数》5日間 《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
《主催》二紀会佐賀支部



道数（みちすう）展—佐賀大学で学んだ表現者たち

佐賀大学で美術を学び、現在もそれぞれ作家活動を続ける卒業生たちの展覧会。「道数」は、未知数と道の数だけの進路を表し、油絵、インスタレーション、陶芸、木工工芸の作品が並んだ。

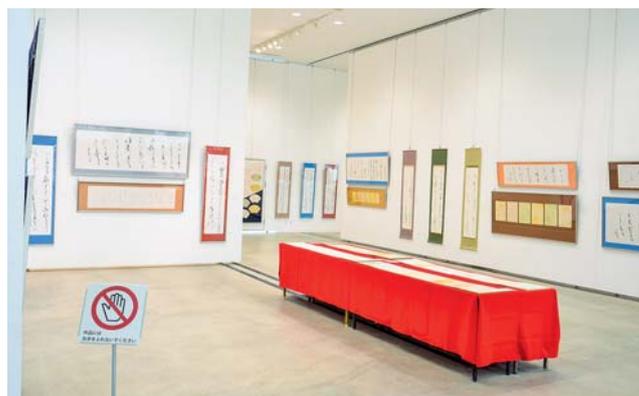
《会期》平成26（2014）年9月10日（水）～9月15日（月・祝）
《開館日数》6日間 《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
《主催》道数展実行委員会



第28回 かな書道研究 佐賀蒼松会展

かな書道における佐賀県内最大会派「蒼松会」の社中展。古今和歌集など古典を題材に、変体かなや王朝かなで書いた和歌や短歌など65点が並んだ。

《会期》平成26（2014）年10月1日（水）～10月5日（日）
《開館日数》5日間 《会場》ギャラリー1、ギャラリー2
《主催》かな書道研究蒼松会



佐賀大学佐賀錦研究所開設記念 佐賀錦・鹿島錦展

佐賀大学に佐賀錦・鹿島錦に関する講座が開設されるにあたり、作品を紹介。ハンドバッグや帯留めなど、約100点が展示され、中でも鹿島錦保存会が3年がかりで織り、祐徳稲荷神社に寄進した几帳（縦2メートル、幅約1.5メートル）が話題となった。



《会期》平成26(2014)年10月1日(水)～10月19日(日)
《開館日数》16日間 《会場》スタジオ
《主催》佐賀大学佐賀錦研究所
《後援》佐賀県・佐賀市・鹿島市



Ecole de Seoul—韓国女流美術家展

ソウルで活動する女性画家による美術団体「エコール・ド・ソウル」のメンバー11名の展覧会。当館では初めて国外からの作品を迎え、韓国美術の今を感じる機会となった。



《会期》平成26(2014)年10月16日(木)～10月18日(土)
《開館日数》3日間 《会場》ギャラリー1、ギャラリー2
《主催》韓国女流美術家展実行委員会



平成26年度 JA 共済小・中学生第50回書道・第40回交通安全ポスターコンクール

佐賀県内の小・中学生の金賞から佳作までの受賞作品324点の作品が並び、受賞者の家族などが来館。10月25日には金賞を受賞した生徒の表彰式が開催された。

《会期》平成26(2014)年10月23日(木)～11月3日(月・祝)
《開館日数》11日間
《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ(25日のみ)
《主催》佐賀県内JA/ JA 共済連佐賀



Tree for five—ワークショップ & インスタレーション

《概要》

平成28年の新学部開設に向けて5つの顔(文教、経済、理工、農、医学…佐賀大学の各学部の象徴)と胎児(新学部の象徴)を持つ大木の化身「キョボッキー」を展示室に出現させ、来館者と共にプラスチック板で制作した葉を飾り付けた。

《会期》平成26(2014)年10月28日(火)～11月9日(日)
《開館日数》12日間 《会場》スタジオ
《主催》佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程(西洋画専攻)



第3回佐賀大学コンテンツデザインコンテスト

「専門分野における成果(コンテンツ)を洗練し、その過程を理論的・方法的により良い表現(デザイン)として発信すること」が求められていることを背景に、佐賀大学が開催しているコンテスト。国内外を問わず参加者が集まり、入選作品の展示と、制作者自身による作品のプレゼンテーション、それらを加味した公開審査が行われた。
《会期》平成26(2014)年11月12日(水)～11月16日(日)
《開館日数》5日間
《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室



《主催》佐賀大学 / 佐賀大学地域環境コンテンツデザイン研究所
《共催》C-revo、6者協定(佐賀県・佐賀県市長会・佐賀県町村会・佐賀県商工会議所連合会・佐賀県商工会連合会・佐賀大学)
《後援》佐賀新聞社、読売新聞西部本社、朝日新聞社、西日本新聞社、毎日新聞社、NHK佐賀放送局、STSサガテレビ、エフエム佐賀、NBCラジオ佐賀、CG-ARTS協会



佐賀大学 美術・工芸課程 第56回総合展

佐賀大学美術・工芸課程の3年生を主体とした、伝統あるグループ展(佐賀大学美術館での開催は2回目)。展覧会が始まるまでは、学内でカウントダウン企画が行われ、会期中は展示作品に関連したワークショップや、メインストリートの並木を使った屋外展示などが企画された。



《会期》平成26(2014)年11月21日(金)～12月7日(日)
《開館日数》15日間
《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室、中庭
《主催》佐賀大学文化教育学部 美術・工芸課程(第56回総合展実行委員会)



「医学のあけぼのから先端医療まで」展—300年の医学の進歩を可視化する

『解体新書』をはじめ佐賀藩の医学資料から、人工心臓や手術支援ロボット等の最先端医療機器や3Dの診断画像などを紹介。2階展示室では講演会が開催され、スタジオでは日替わりで医療メーカーによるデモンストレーションが行われた。

来館者は普段見る機会のない最先端医療器具を間近で見たり、体験することができる展覧会となった。

《会期》平成26(2014)年12月13日(土)

～平成27(2015)年1月12日(月・祝)

《開館日数》19日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、
特別展示室、小展示室

《観覧料》500円(サガテレビにより徴収)

《主催》サガテレビ / 佐賀大学

《共催》佐賀県医師会

《後援》佐賀市医師会、佐賀県教育委員会、佐賀市教育委員会、
佐賀新聞社、西日本新聞社

《関連事業》

公開講座(時間はすべて11:00～12:00)

●平成26年

日時:12月13日(土)

演題:「黎明期の我が国医学」

講師:青木歳幸氏(地域学歴史文化研究センター特命教授)

日時:12月20日(土)

演題:「どこまで見えるの?最先端の画像診断」

講師:中園貴彦氏(医学部放射線部准教授)

日時:12月21日(日)

演題:「心臓手術の過去、現在、未来」

講師:森田茂樹氏(医学部胸部・心臓血管外科教授)

日時:12月23日(火・祝)

演題:「ロボットリハビリテーションについて学ぼう!」

講師:浅見豊子氏(医学部先進総合機能回復センター診療教授)

●平成27年

日時:1月7日(水)

演題:「人工関節のあゆみと佐賀大学の新たな取り組みについて」

講師:江頭秀一氏(医学部整形外科医員)

日時:1月12日(月・祝)

演題:「がんは予防できる?」

講師:藤本一真氏(医学部消化器内科教授)





《種痘の図》(佐賀県医療センター好生館所蔵)を展示



ダビンチ実演

景観啓発パネル展

佐賀大学美術館が「第18回佐賀市景観賞」を受賞したのを機に、過去の景観賞受賞作品および景観重要建造物等を写真で紹介。初日には表彰式とパネルディスカッションも開催。

《会期》平成27(2015)年1月22日(木)～1月29日(木)
 《開館日数》7日間 《会場》スタジオ
 《主催》佐賀市



表彰式

第45回 水彩連盟佐賀支部展（白水会）

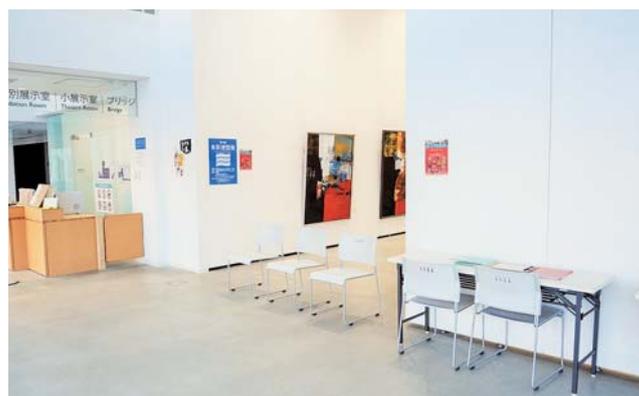
18名の作家による水彩画展。従来の「水彩画」のイメージに囚われることなく、アクリル、ガッシュ（不透明水彩）などを用いて多様な可能性を追求した。F 50号から100号まで、33点が並んだ。



《会期》平成27（2015）年2月3日（火）～2月8日（日）

《開館日数》6日間 《会場》ギャラリー1、ギャラリー2

《主催》水彩連盟佐賀支部



文化教育学部美術・工芸課程 卒業制作展/教育学研究科美術 修了制作展

本学で美術・工芸を学んだ学部生・院生による卒業・修了制作展。当館では2度目の開催となり、学生同士知恵を出し合いながら、また、今までのお互いの経験を活かしながら試行錯誤し学生生活の集大成となる作品の展示空間を自分たちで作り上げた。



《会期》平成27（2015）年2月20日（金）～2月28日（土）

《開館日数》8日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室

《主催》佐賀大学文化教育学部・佐賀大学大学院教育学研究科



彫刻集団・佐賀 第29回展

佐賀大学の美術・工芸課程の卒業生や、県内で活動する彫刻家で作る「彫刻集団・佐賀」の第29回展。元佐賀美術協会理事長の成富宏氏や、佐賀大学の現教員を含む、17人の作家たちの作品が並んだ。



《会期》平成27(2015)年3月4日(水)～3月8日(日)
《開館日数》5日間 《会場》ギャラリー2、スタジオ
《主催》彫刻集団・佐賀



佐賀大学デジタル表現者養成プログラム(第5期生)修了作品展—電腦芸術展

佐賀大学で「デジタル表現技術者養成プログラム」を学んだ学生による修了研究作品展。CGアニメーションやドキュメンタリー、プロジェクションマッピングなど多種多様な作品が展示され、最終日には九州産業大学芸術学部の佐野彰氏による特別講演会も開催された。

《会期》平成27(2015)年3月5日(木)～3月8日(日)
《開館日数》4日間 《会場》ギャラリー1、小展示室
《主催》佐賀大学e-ラーニングスタジオ



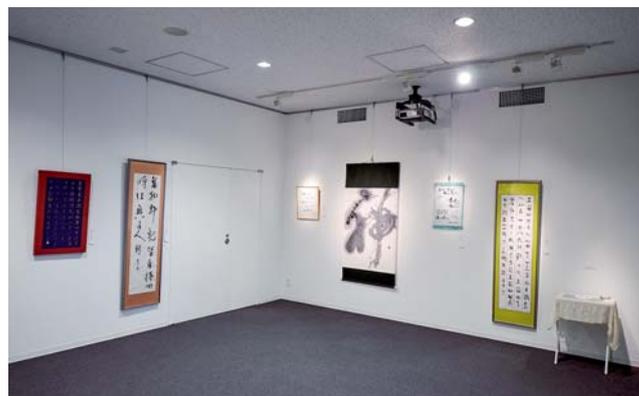
第16回 卒業書作展

佐賀大学文化教育学部の国語科（書写）教室の学生による書道作品展。4年生の卒業書作をはじめ、1年生から3年生は学年ごとに1作品ずつと教員1名の展示。また、12月に特別支援学校を訪問した際に書道のパフォーマンスをした様子のビデオ上映も行った。

《会期》平成27（2015）年3月10日（火）～3月15日（日）

《開館日数》6日間 《会場》小展示室

《主催》佐賀大学文化教育学部学校教育課程 教科教育選修
国語（書写）分野



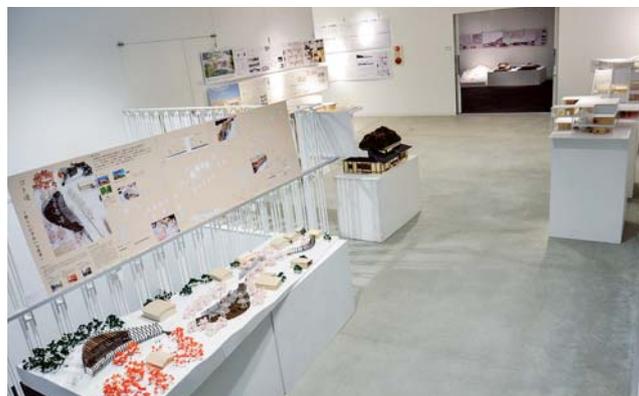
工学系研究科都市工学専攻・理工学部都市工学科 修士制作・卒業制作展

理工学部都市工学科4年生が卒業研究において設計した建築・都市デザインに関する卒業制作を図面・模型により展示。丹羽賞・優秀賞・奨励賞受賞者4名のほか計13組の作品及び3年生優秀作品の展示を行った。

《会期》平成27（2015）年3月18日（水）～3月27日（金）

《開館日数》9日間 《会場》小展示室

《主催》佐賀大学大学院工学系研究科都市工学専攻・佐賀大学理工学部都市工学科



〔プロムナード使用〕

日本フィル・金管五重奏プロムナードコンサート

平成27年2月の日本フィルハーモニー交響楽団の本公演を前に、日本フィル佐賀公演を支える佐賀大学管弦楽団と、日本フィルの楽団員が共同で開催したプレコンサート。九州出身の金管奏者のレベルの高い演奏と、合間に楽器の説明なども交え、初心者でもわかりやすく楽しめるコンサートとなった。

《会期》平成26(2014)年10月24日(金) 12:10~12:50

《会場》プロムナード

《主催》日本フィル佐賀公演実行委員会

《共催》佐賀大学管弦楽団



佐賀大学管弦楽団 プレコンサート

佐賀大学管弦楽団が12月21日に開催する定期演奏会を前に、佐賀大学美術館のプロムナードで行ったプレコンサート。寒風が強く吹く中、楽団員たちが日頃の練習の成果を披露した。

《会期》平成26(2014)年12月18日(木) 12:10~12:50

《会場》プロムナード

《主催》佐賀大学管弦楽団



3. 実習・研修

〔監視・受付実習〕

《期間》平成26(2014)年10月9日(木)～11月28日(金)

《参加者》32名

《内容》学芸員資格取得を希望する1～3年生の学内実習。

主に当館主催の展覧会「開館一周年記念海老原喜之助」「秘めたる名品展」において、1人7時間相当の監視実習を行った。参加者は監視や受付に入って気づいた事などをレポートで提出。美術館職員がコメントを返す形で質問に答えた。



〔燻蒸実習〕

《期間》平成26(2014)年10月18日(土)、10月29日(水)

《参加者》18名

《内容》新収蔵作品を収蔵庫に入れる前に殺カビ・殺虫を目的として実施した燻蒸作業(p.42参照)の一部を博物館実習2年目の学生が見学及び体験できる形とした。後日、作業結果報告として、実施業者からの説明を聞いた。



[学芸員技術研修会：展示グラフィック]

《期間》平成26(2014)年12月17日(水)

《講師》熊谷淳一氏(株式会社ノイエデザイン代表)

《参加者》21名

《会場》佐賀大学工学部1号館1階(地域連携デザイン工房)

《内容》九州産業大学の主催で、学芸員等博物館関係者を対象にした研修会が九州各地で開催されており、「展示グラフィック」は佐賀大学を会場に行われた。美術館のチラシを作成するうえでの基礎や、他館チラシの相互評価など、グループワークを交えながら広報物における「伝える技術」の向上を図った。



4. 刊行・掲載・見学

〔刊行物〕

パンフレット「経済学部50周年記念事業

芸術と経済—アートとお金の意外な関係」

《概要》展覧会内容抜粋・解説/経済学部の学科・研究室の紹介

《仕様》A5版16ページ+裏表方観音折 4ページ 4色刷

《編集・発行》佐賀大学美術館・佐賀大学経済学部

《発行部数》4,000部

《発行日》平成26年7月25日



活動報告書「経済学部50周年記念事業

芸術と経済—アートとお金の意外な関係」

《概要》展覧会概要/報告/出品目録/講演会

抄録/イベント関係/刊行物・制作物/

アンケート集計結果

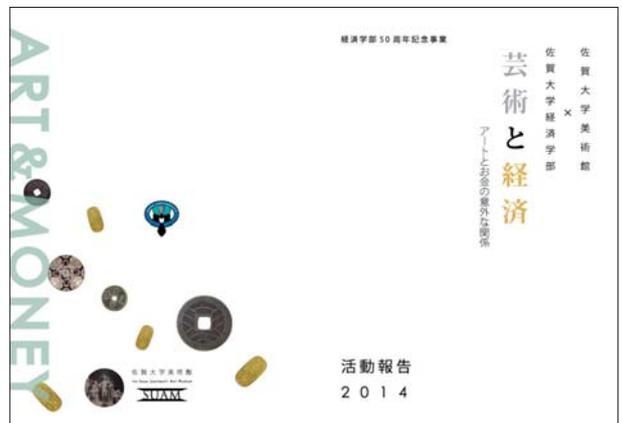
《仕様》A4版 32ページ 4色刷

《編集》佐賀大学美術館

《発行》佐賀大学経済学部

《発行部数》500部

《発行日》平成27年3月10日



パンフレット「シリーズ美術・工芸教室

小木曾誠・徳安和博—飛翔する夢・森の中」

《概要》巻頭エッセイ/出品カタログ/絵葉書4種

《仕様》A5版16ページ+裏表方観音折 4ページ 4色刷

《編集・発行》佐賀大学美術館

《発行部数》2,000部

《発行日》平成26年9月19日



〔掲載紙・テレビ・ラジオ〕 ※本頁は館主催事業についての報道のみ抜粋。
平成26年度は総数で新聞等140件、TV・ラジオ34件が掲載・放送された。

- ・ニュース「石本秀雄展」(3月20日 NHK)
- ・特美の創始者 石本秀雄のアトリエ展(4月1日 佐賀新聞、4月4日 西日本新聞)
- ・記者だより「佐賀大学美術館 芸術・工芸の文化発信」(4月6日 西日本新聞)
- ・石本秀雄のアトリエ展(4月10日 読売新聞、4月17日 朝日新聞)
- ・石本秀雄さん絵画展(4月24日 読売新聞)
- ・佐賀大特美創設者 家族の絵も(4月27日 朝日新聞)
- ・サガアートトリップ「佐賀を巡りアートを楽しむ」(5月15日 読売新聞)
- ・九州発 大学の實力 佐賀大学芸術学部 教育学部 新生へ(6月 読売新聞社広告局)
- ・地域と結ぶ 佐賀大学法人化の10年(上) 変化(7月25日 佐賀新聞)
- ・芸術と経済—アートとお金の意外な関係(6月27日 佐賀新聞、7月12日 佐賀新聞)
- ・さんさんネット(7月24日 朝日新聞)
- ・芸術と経済—アートとお金の意外な関係(7月26日 佐賀新聞、7月29日 佐賀新聞)
- ・共同企画展「アートとお金の意外な関係」(8月7日 朝日新聞)
- ・佐賀大美術館「芸術と経済」展/お金×美術 関係ひも解く(8月12日 佐賀新聞)
- ・芸術と経済—アートとお金の意外な関係(8月14日 佐賀新聞、8月21日 読売新聞)
- ・ニュース(8月20日 サガテレビ)
- ・佐賀大学美術館1周年(9月13日 佐賀新聞)
- ・小木曾誠・徳安和博—飛翔する夢・森の中(8月29日 佐賀新聞、9月14日 佐賀新聞、9月19日 佐賀新聞)
- ・実力派の「今」代表作で追う/佐賀大の徳安・小木曾准教授が2人展(9月23日 佐賀新聞)
- ・2年目へ挑む展示/絵と彫刻 異なる世界観 佐賀大学美術館(9月23日 朝日新聞)
- ・開館1周年記念 海老原喜之助展(8月29日 佐賀新聞、9月14日 佐賀新聞、9月19日 佐賀新聞、9月30日 佐賀新聞、10月3日 佐賀新聞、10月9日 佐賀新聞、10月31日 佐賀新聞)
- ・所蔵品紹介 海老原喜之助展(10月2日 朝日新聞、10月16日 朝日新聞)
- ・佐賀大学美術館入館者5万人/開館1年で達成/荒巻さん親子に記念品(10月25日 佐賀新聞)
- ・佐賀大学美術館入館者5万人を突破(10月30日 読売新聞)
- ・佐賀大学美術館 入館5万人に、開館1年で達成(11月5日 朝日新聞)
- ・公開講座(10月25日 佐賀新聞)
- ・佐賀大学所蔵 秘めたる名品展(10月31日 佐賀新聞、11月20日 朝日新聞、11月28日 佐賀新聞、12月14日 佐賀新聞、12月30日 佐賀新聞、1月29日 朝日新聞、1月30日 佐賀新聞)
- ・特別支援学校・木版画展(12月30日 佐賀新聞)
- ・がんばるわたしたちの木版画展(1月15日 読売新聞、1月22日 朝日新聞)
- ・高等部での生活 版画で生き生き(1月19日 佐賀新聞)
- ・木版画で活動PR(1月21日 毎日新聞)
- ・額外し、名画の“秘密”紹介(1月23日 佐賀新聞)
- ・STS ニュース(1月27日 サガテレビ)
- ・建物の所有者らを表彰 29日までパネル展も(1月24日 読売新聞)
- ・都市景観賞3件を選出 佐賀市(1月26日 西日本新聞)
- ・佐賀市景観賞に選出(1月28日 佐賀新聞)
- ・佐賀市景観賞展(1月 建設新聞、1月 ぶんぶんテレビ)
- ・まちかどカレンダー(1月26日 佐賀新聞)
- ・さるく佐賀 季節ごと変わる表情/佐賀大美術館近くの並木道(2月21日 朝日新聞)

〔掲載誌〕

- ・ポーラ美術館コレクション広報タブロイド紙A3版「サガアートトリップ」4月号「美術館情報」
- ・JR九州情報誌 Please 5月号 No.324「美術館情報」
- ・福岡 WALKER 6月号「美術館情報」
- ・ぶらぶら美術・博物館プレミアムアートブック2015-2016「美術館情報」
- ・生活情報誌ポス 熊本版 11月号 VOL.125「ミュージアムカフェ情報」
- ・PASSION 11月号 vol.36「美術館情報」
- ・Musée ミュゼ vol.110「芸術で地域を拓き 芸術で世界を拓く 佐賀大学美術館」

[見学団体一覧]

※事前連絡および申告にて把握できた団体名称及び人数

期日	団体名	人数
4月23日	高砂会	26
5月14日	「日本工芸史」受講者	62
5月15日	「芸術の歴史と理論(絵画のみかた)」受講者	20
5月16日	学校法人本願寺学園 若楠幼稚園	33
5月16日	「西洋画」受講者	21
5月16日	佐賀県立小城高等学校 美術部	11
5月17日	学校法人旭学園 佐賀女子短期大学付属 佐賀女子高等学校	94
5月17日	学校法人君が淵学園 崇城大学	49
5月18日	ニチケアセンターさが	11
5月20日	勸興ウォーキングクラブ	11
5月21日	社会福祉法人報土会 保育所 めぐみ園	34
5月22日	学校法人精幼稚園	17
5月23日	福生苑デイサービスセンター	14
6月4日	諸富町西寺井ふれあいサロン	21
6月5日	「大学入門科目Ⅰ」受講者	14
6月7日	学校法人佐賀龍谷学園 龍谷高等学校 1年生	92
6月7日	神埼郷土研究会	24
6月18日	「芸術創造Ⅱ」受講者	16
6月19日	NPO 法人長崎市美術振興会	30
6月20日	長崎県立佐佐見高等学校 2年生(美術・ 工芸科)	22
7月5日	教員免許講習	15
8月4日	佐賀県立唐津西高等学校 PTA	23
8月6日	熊本市立必由館高等学校美術部	27
9月3日	佐賀大学新採用職員研修	14
9月13日	NPO 法人地球市民の会	20
9月14日	理工学部工業化学科	10
9月26日	佐賀県立香楠中学校 3年生	75
10月1日	PTA	83
10月2日	育友会 熊本県立東稜高等学校 PTA	42

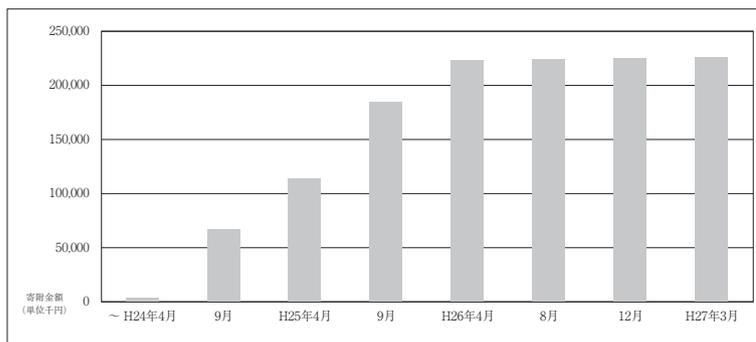
期日	団体名	人数
10月3日	福岡県立小郡高等学校 PTA	50
10月3日	育西会 熊本県立熊本西高等学校 PTA	42
10月7日	福岡県立大川樟風高等学校 PTA	20
10月8日	学校法人旭学園 佐賀女子短期大学付属 佐賀女子高等学校ファッション文化コース	22
10月8日	福岡県立福岡中央高等学校 PTA	75
10月9日	福岡県立春日高等学校 PTA	100
10月10日	福岡県立北筑高等学校 PTA	40
10月18日	佐賀県退職公務員連盟佐賀支部	26
10月24日	有限会社肥前観光	21
10月28日	学校法人精幼稚園	11
11月13日	佐賀市立北山東部小学校	7
11月22日	佐賀大学文化教育学部附属中学校 美術部	20
12月2日	学校法人佐賀理容美容専門学校	23
12月2日	ラジ&ウォーク	16
12月2日	学校法人旭学園 佐賀女子短期大学付属 佐賀女子高等学校	39
12月4日	「図工科教育法Ⅱ」受講者	51
12月4日	佐賀県立鳥栖商業高等学校	45
12月4日	「図工科教育法Ⅱ」受講者	23
12月7日	佐賀県立唐津東高等学校	8
12月16日	「医工学入門」受講者	54
12月17日	「西日本地域史論」受講者	19
1月8日	国際文化課程 学生	31
1月27日	学校法人精幼稚園	22
2月5日	国立大学法人等監事協議会	40
2月21日	佐賀市立城東中学校	20
2月27日	二十日会	20
3月4日	新日本婦人の会	20
3月14日	江北町立江北中学校 美術部	14

平成26年4月23日～平成27年3月14日

5. 寄附

[美術館設置募金の経緯]

- 平成23年 6月 美術館設置募金 WG 設置
- 平成24年 4月 美術館設置事業募金開始
- 平成25年 6月 寄附者芳名帳の公開を開始
- 平成25年 6月 美術館規則の制定に伴い、美術館設置募金 WG を解散
- 平成25年 9月 美術館に高額寄附者銘板を設置
- 平成25年10月 美術館開館後も美術館設置事業募金を継続
- 平成27年 3月 募金総額226,040,276円
(平成27年 3月31日現在)



6. 職員の館外調査研究・研修等

佐々木奈美子

日時：平成26年 7月 5日

場所：福岡市博物館

目的：九州藝術学会第10回記念大会発表：「石本秀雄に見る西洋美術の影響」

大塚麻理子

日時：平成27年 1月22日

場所：九州産業大学

目的：平成26年度博物館実習報告会参加

佐々木奈美子

日時：平成27年 1月22日～23日

場所：手塚治虫記念館、宝塚市役所

目的：宝塚市新規文化芸術施設建設に伴う意見交換会の出席

7. 入館者一覧表

[事業別入館者一覧]

※数値に重複あり

展覧会	入館者数	会期	日数	主催	展示会場
特美の創設者 石本秀雄のアトリエ展	4518	3月20日-5月6日	42	佐賀大学美術館	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
第5回 A DOMANI 展	3513	5月14日-25日	11	佐賀大学文化教育学部 美術・ 工芸課程(西洋画専攻)	ギャラリー1、ギャラリー2
日本折紙学会 折紙探偵団・友の会九州展				スタジオ	
体験! 富士町古湯映画祭-第31回古湯映画祭ブ レイベント	1279	6月3日-8日	6	富士町古湯映画祭実行委員会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
九州地区大学美術科 8 BOXes 展	1442	6月18日-29日	11	日本教育大学協会九州地区美 術部門	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
デッサンの前と後ろ -美術・工芸講座の授業風景	1924	7月3日-18日	14	佐賀大学文化教育学部美術・ 工芸課程	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
芸術と経済-アートとお金の意外な関係	4031	7月25日-8月24日	24	佐賀大学美術館/佐賀大学経 済学部	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ 特別展示室
第37回 二紀会 佐賀支部展	1059	9月3日-7日	5	二紀会佐賀支部	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
道数(みちすう)-佐賀大学で学んだ表現者たち	664	9月10日-15日	6	道数展実行委員会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
シリーズ美術・工芸 小木曾誠・徳安和博展	1421	9月19日-26日	7	佐賀大学美術館	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
開館1周年記念 海老原喜之助展	2444	9月19日-11月9日	45	佐賀大学美術館	特別展示室 ※観覧者実数
第28回 かな書道研究 蒼松会	3556	10月1日-5日	5	かな書道研究 蒼松会	ギャラリー1、ギャラリー2
佐賀大学佐賀錦研究所開設記念 佐賀錦・鹿島 錦展		10月1日-19日	16	佐賀大学佐賀錦研究所	スタジオ
Ecole de Seoul-韓国女流美術家展		10月16日-18日	3	韓国女流美術家展実行委員会	ギャラリー1、ギャラリー2
平成26年度 JA 共済小・中学生第50回書道・第 40回交通安全ポスターコンクール	4409	10月23日-11月3日	11	佐賀県内JA/JA 共済連佐賀	ギャラリー1、ギャラリー2
Tree for Five		10月28日-11月9日	12	佐賀大学文化教育学部 美術・ 工芸課程(西洋画専攻)	スタジオ
佐賀大学公開講座「世界の芸術文化」	103	10月26日、11月1日、 15日	3	佐賀大学文化教育学部、佐賀 大学美術館	スタジオ(3回中2回は館外) ※参加者実数
第3回 コンテンツデザインコンテスト	1147	11月12日-16日	5	佐賀大学/佐賀大学地域環境 コンテンツデザイン研究所	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ 小展示室
佐賀大学 美術・工芸課程 第56回総合展	2830	11月21日-12月7日	15	佐賀大学文化教育学部 美術・ 工芸課程(第56回総合展実行 委員会)	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ 小展示室、中庭
佐賀大学所蔵 秘めたる名品展	3819	11月21日-12月7日、 1月17日-3月15日	65	佐賀大学美術館	特別展示室 ※観覧者実数
医学のあけぼのから先端医療まで展 -300年の医学の進歩を可視化する	2652	12月13日-1月12日	19	サガテレビ、佐賀大学	全館 ※観覧者実数
がんばるわたしたちの木版画展 -佐賀大学特別支援学校高等部	1145	1月17日-29日	11	佐賀大学美術館/佐賀大学附 属特別支援学校	ギャラリー1、ギャラリー2
景観啓発パネル展		1月22日-29日	7	佐賀市	スタジオ
第45回 水彩連盟佐賀支部展(白水会)	749	2月3日-8日	6	水彩連盟佐賀支部	ギャラリー1、ギャラリー2
文化教育学部美術・工芸課程 卒業制作展	2116	2月20日-28日	8	佐賀大学文化教育学部・佐賀 大学大学院教育学研究科	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ 小展示室
教育学研究科美術 修了制作展				彫刻集団・佐賀 第29回展	3月4日-8日
佐賀大学デジタル表現者養成プログラム(第5期 生)修了作品展-電腦芸術展	1216	3月5日-8日	4	佐賀大学 e-ラーニングスタジオ	ギャラリー1、小展示室
第16回 卒業書作展	749	3月10日-15日	6	佐賀大学文化教育学部 学校 教育課程(教科教育選修 国 語(書写)分野)	小展示室
工学系研究科都市工学専攻・理工学部都市工学 科 修士制作・卒業制作展	810	3月18日-27日	9	佐賀大学大学院工学系研究科 都市工学専攻・佐賀大学理工 学部都市工学科	小展示室

平成26年3月20日～平成27年3月27日

[年度別入館者実績]

※数値に重複なし

	総入館者数	うち有料入館者数	開館日数
平成25年度	27167	0	125
平成26年度	40780	2652	254

平成25年10月2日～平成27年3月31日

8. 新収蔵作品

平成26年度に佐賀大学の所蔵となった物品の内、佐賀大学美術館が保管もしくは管理する作品。

収蔵年	作家名	作家名_E	作品名	作品名_E
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	トレド	Toledo
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	オーバーの女	Woman Wearing a Coat
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	自画像	Self-portrait
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	パリのモデル	Model in Paris
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	スケッチブック	Sketch Book
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	自筆ノート(西洋美術史)	Notebook : Western Art History
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	自筆ノート(講演)	Notebook : Lecture
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	手鏡の女	Woman with a Mirror
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	橙と卓上の静物	Still Life on the Table
2014	藤田隆治	FUJITA, Takaharu	五ひき	Five Owls
2014	石本秀雄	ISHIMOTO, Hideo	カンナの花	Flowers of Canna
2014	井手誠一	IDE, Seiichi	銀杏並木秋景	Ginkgo Trees in Autumn
2014	上杉耕司	UESUGI, Koji	岩と波海原	Coast; Rocks and the Wave
2014	小野正人	ONO, Masato	パラグアイの農家	Farm House in Paraguay
2014	小野正人	ONO, Masato	金盞花	Calendula
2014	北嶋兵一	KITAJIMA, Hyouchi	本栖高原	Motosu Kogen
2014	古瀬虎麓	KOSE, Koroku	あじさい	Hydrangea
2014	下川都一郎	SHIMOKAWA, Toichiro	牛	Bull
2014	立石春美	TATEISHI, Harumi	鯉	Carp
2014	田中宗一	TANAKA, Soichi	古湯雄渕	Obuch; in Furuyu
2014	手島 貢	TESHIMA, Mitsugu	阿蘇早春	Mt. Aso in early Spring
2014	納富 進	NOTOMI, Susumu	雲仙	Mt. Unzen
2014	納富 進	NOTOMI, Susumu	夏の岬	Cape in Summer; the Ariake
2014	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	麦秋	Early Summer
2014	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	呼子(初秋)	Yobuko, Harbor in early Autumn
2014	宮地 亨	MIYACHI, Toru	燈火小閑	Moment of Evening Lights
2014	宮地 亨	MIYACHI, Toru	壱岐	Iki island
2014	村岡平蔵	MURAOKA, Heizo	夏の果物	Summer Fruits
2014	村岡平蔵	MURAOKA, Heizo	西熱海	Nishi Atami
2014	村岡平蔵	MURAOKA, Heizo	新緑	Fresh Verdure in early Summer
2014	若林景光	WAKABAYASHI, Kagemitsu	ユーカリ樹のある庭	Garden of Eucalyptus Trees
2014	若林景光	WAKABAYASHI, Kagemitsu	川上の風景	Landscape of Kawakami
2014	若林景光	WAKABAYASHI, Kagemitsu	商工会館	Chamber of Commerce Building
2014	成富 宏	NARITOMI, Hiromu	雷	Thunder

分類	制作年(和暦)	制作年(西暦)	寸法(H×W×D)	素材	出品歴	寄贈者
西洋画	昭和41年	1966	130.1×97.0	油彩・カンヴァス	第32回東光展	岡田章子氏
西洋画	昭和35年	1960	145.2×97.3	油彩・カンヴァス	第26回東光展	岡田章子氏
西洋画	昭和4年	1929	45.4×37.8	油彩・カンヴァス		岡田章子氏
デッサン	昭和39年頃	ca. 1964	44.7×30.6	コンテ・紙(灰色)		岡田章子氏
資料	昭和3～6年頃	1928～31	18.6×12.8×2.3	紙・鉛筆、一部水彩		岡田章子氏
資料	昭和24年～	1949～	25.8×18.2	紙・鉛筆		岡田章子氏
資料	昭和24年～	1949～	25.8×18.2	紙・鉛筆		岡田章子氏
デッサン	昭和38年	1963	25.9×18.3	鉛筆・紙(印刷物裏面)		金子 剛氏
デッサン	昭和38年	1963	25.9×18.0	鉛筆・紙(印刷物裏面)		金子 剛氏
日本画	昭和36年頃	ca. 1961	96.3×159.3	紙本着色(岩絵具・紙)		中牟田家
西洋画			45.4×37.6	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和33年	1958	37.8×45.6	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和15年	1940	33.3×45.6	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和37年	1962	33.6×45.7	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和35年	1960	40.9×31.8	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和34年	1959	37.9×45.5	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画			41.1×32.1	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画			31.8×40.4	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
日本画			51.5×57.3(本紙)	絹本着色		旧佐賀商工会館
水彩画	昭和36年	1961	34.0×46.0	水彩・紙		旧佐賀商工会館
西洋画			45.7×60.5	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画			72.7×91.1	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画			37.8×45.5	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画			45.5×37.9	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和31年	1956	24.3×33.3	油彩・カンヴァスボード		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和40年	1965	145.5×97.0	油彩・カンヴァス	第8回日展	旧佐賀商工会館
西洋画			24.2×33.0	油彩・カンヴァスボード		旧佐賀商工会館
西洋画			37.8×45.6	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画			31.9×40.9	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和38年	1963	53.0×45.7	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和30年	1955	38.1×45.6	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和41年	1966	53.0×45.3	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
西洋画	昭和32年	1957	53.5×65.3	油彩・カンヴァス		旧佐賀商工会館
彫刻	平成16年	2004	146×65×80	ブロンズ ※平成27年3月19日屋外彫刻として設置		

9. 作品修復・作品貸出等

作品修復

作者名：海老原喜之助

作品名：衣を与う

点数：1点

修復作業期間：平成26年8月19日（火）～21日（木）

委託先：絵画修復 たけのした工房

作業内容

* 作業前の状態

- ・画面の絵の具層は油分が失われて、接着力がなくなり、亀裂・剥離・層間剥離・剥落が全面に現れている。

* 保存修復処置内容

- ・画面の絵の具層の亀裂・剥離・層間剥離・剥落箇所に膠水を数回注入し、固着。
- ・絵の具層の剥落箇所の充填、成形。
- ・表面、裏面の殺菌、防黴処置。
- ・側面部分の張り調整のための補強。

燻蒸

作品：新収蔵作品33点

燻蒸作業期間：平成26年10月18日（土）～20日（月）

場所：2階小展示室にテントを設営して実施

作品貸出記録

「生誕110年 海老原喜之助展」

場所：下関市立美術館/横須賀美術館

会期：平成26年11月15日（土）～12月28日（日）/平成27年2月7日（土）～4月5日（日）

貸出作品：海老原喜之助「衣を与う」1956年

図録掲載：「生誕110年 海老原喜之助展」（鹿児島市立美術館/下関市立美術館/横須賀美術館）no. 85, p. 88.

2014
特美の創始者
石本秀雄のアトリエ

会期 = 2014/3/20(木) → 2014/5/6(火)

石本秀雄のアトリエ

佐
賀
大
学
美
術
館

紀
要

展覧会「石本秀雄のアトリエ」

——室内画の展開と美術教育の理念

佐々木 奈美子

佐賀大学美術館 学芸員

はじめに

石本秀雄（1908-1986）は日展、東光会展に発表をつづけた作家であり、同時に、小城中学を皮切りに師範学校、佐賀大学その他で教えた美術教育者であった。佐賀大学では、初代西洋画の教員として、昭和28年の通称「特設美術科」¹創設時に中心的な役割を果たし、地域の教育界に強いリーダーシップを発揮した。会長をつとめた大学美術教育学会、佐賀県展ほか今日まで継承されている幾つもの組織や、輩出した後身たちの存在が、教育活動・作家活動双方の彼の2足のわらじ、それぞれの大きさを物語っている。

2013年10月にオープンした佐賀大学美術館では、大学の美術教育の歴史を辿った「開館記念展」終了後の最初の企画展として「特美の創始者—石本秀雄のアトリエ」展（2014年3月20日・5月6日）を行った。本学の美術・工芸教育の重要性からも最初に取り上げるべき作家であることは間違いなかったが、逆に、限られた展示スペースで半世紀に及ぶ画業の全てを余すところなく紹介するのは困難であり、どのような角度から照射するかに迷いはあった。

幸運にも会期直前に、ゆかりの小城市において石本の展覧会が予定されていた²。近隣市でしっかりとした回顧展が行われ、「桜島」や「長崎」連作のような風景画の基準作が展示されるので、当館では思い切って画業の初期から「特美」へと向かう時期を中心に室内画・人物画のみに絞り込み、ご遺族、佐賀県立美術館、そして本学が所蔵する26点で展示を構成した³。

もう一つの幸運は、画家のご家族の厚意により貴重な資料類を事前に拝見する機会を頂いたことである。そこから幅広い交友関係や、大胆なイメージとは異なる細心と言えるほどの努力の跡など、人間・石本秀雄の像が結ばれてきた。そこで本展覧会では、室内画を通して画家の人物像に近づきたいと考えた。

創作上の一つの頂点である《家族の肖像》までの数年間、石本は佐賀大学では「特美」の開設に向けて奔走し、地域では、やがて県展へと発展するグループ「西虹会」を組織するなど驚くべき活力で仕事をしていた。言わば、昭和20年代半ばに佐賀の美術・教育界に同時多発的に存在した幾つかのうねりを回す軸であった。

本稿では、人物の描かれた室内画におけるモチーフの扱いの変化や、戦争で一度戸外にはじき出された人物が室内へと戻っていく軌跡を辿る。展覧会の報告と同時に、得られた資料から彼の美術教育の根底をなすものを考察する。

1. 室内画の展開：全ては小城のアトリエから

展示室の入口に置いたダンディな肖像写真は、ご家族から「画家らしい」と太鼓判を押された一枚。そのままの導き先と並ぶ、タキ夫人を描いた2枚の肖像画から展示は始まる。

石本秀雄が東京美術学校・図画師範科を卒業したのは1931（昭和6）年。23歳であった⁴。佐賀県の小城中学に赴任してからの数年間、この地で生涯の基盤を整えることになる。1933（昭和8）年に結婚。新居兼アトリエからは、初期の名品が次々と生み出された。

1932年に熊岡美彦、斎藤与里らが結成した東光会には、第2回展（1934）から参加。K氏奨励賞を受け、同年の帝展に出品した《校庭の春》（fig. 1）では初入選を果たした。後年まで続く東光展と日展へのダブル出品はこの年に始まった。このころ描いたのが、26歳の《自画像》（no. 1）である。



no. 1 自画像
1929（昭和4）
岡田家

展覧会の冒頭におかれた2点の夫人像は1936（昭和11）年の作。28歳になる年である。どちらも家族の前ならではのくつろいだ様子を見せる女性像で、鮮やかに配色された模様など装飾性の高い画面も共通している。しかし、和室と洋間に由来する「すわる」ポーズの違いなど、共通項が多だけに相違点も際立ち、両者に「対」としての構想があったことを伺わせる。ちゃぶ台や和風の調度品にあふ

no. 2 室内小憩
1936 (昭和11)
佐賀県立美術館



no. 3 籐椅子に凭る女
1936 (昭和11)
佐賀県立美術館



no. 4 秋
1938 (昭和13)
佐賀県立美術館

れる《室内小憩》(no. 2)は5月の第1回大潮会展で大潮会賞を、カーテン、テーブル、グラス等が配された洋風の室内風景《籐椅子に凭る女》(no. 3)は10月の新文展で特選候補となった。《籐椅子に凭る女》の前に立つ画家の写真が残されている (fig. 2)。

この作品については、翌年の東光展に斎藤与里が出品した《K子像》(fig. 3)など周囲に同趣向の存在も見られるが、石本作品では夫人の両手の位置に特徴があり、翌年の2月に第一子の誕生を待つ時期であったことから、家族が増える記念画としての性格を見ることができよう。

長女誕生から2か月後の1937 (昭和13)年4月、県立佐賀高等女学校へ。翌1938年、東光会会員となり、同展に《秋》(no. 4)を出品する。庭越しに開放的な家屋が描かれ、色づかいは構図も独特である。画面に広がる地面は、赤い絨毯が敷き詰められたような強い色彩。自然景を手前に、建物を奥に、若干高いところから眺め下すような構図は、帝展初入選作《校庭の春》にも見られる。この、ふわりと浮き上がった視点から眺める構図は石本の初期作品の特徴の一つであり、戦時色が深まるにつれ、そこに赤く染まった地面や夕景が頻出するようになる。

次女誕生2か月後の1943 (昭和18)年11月、35歳の年、佐賀師範学校で教えることとなった。変わらず複数の会に出品を続けていたが、戦局は厳しさを増し、絵具の統制、美術系雑誌の統廃合と作家活動には困難な時局が続いた。1944 (昭和19)年8月に召集され、佐佐保海兵団に配属された。前線には送られず、1年ほどの従軍の後、9月には復員する。

ただ、自宅に戻り前職に復帰したことは、全てが戦前のままに戻ったことを必ずしも意味しない。従軍期、また、戦後の混乱期に何を見て感じたかは本人しか知りえないが、事実として、短期間だが制作の空白が生じた。そのブランクの後、一個人としては破格のエネルギーを傾けて教育現場と地方画壇を動かしていくことになる。

2. 人物画の変遷：室内への回帰

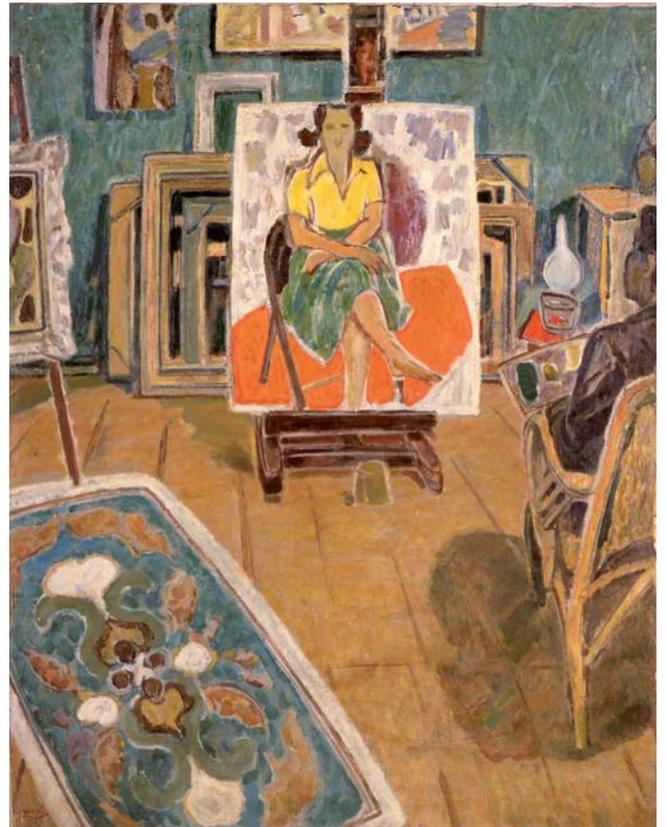
展示室では、1938年の《秋》の次に来るのが、1948年の《庭と少女》(no. 5)である。制作年にして10年とんでいる。発表のなかった期間は終戦をはさんで3年ほどだが、戦争前後の作品には所在不明のものもあり、また、今回の展示テーマである室内画それ自体がそもそも少ない¹⁶⁾。

混乱する戦後画壇。画家たちの前に様々な選択肢があった中、石本の再スタートの場は日展だった。終戦から2年後の1947 (昭和22)年、三女が生まれた年の第3回日展に《少年の頃》(fig. 4)を出品。翌年の第4回展に出したのが《庭と少女》である。室内から一步外に出たこれら2作品では、庭にいる少年や少女、そして猫が描かれている。子供たちは敷石で隔てられ、あろうことか少女は画面で半身を断ち切られている。大胆で不思議な構図である。

《庭と少女》と同じ年、13回の大潮会に出品した《子猫と女》(fig. 5)は椅子に座る女性像。室内の人物画といえるが、身をかがめて足元の猫を見下ろす女性を、さらに上から見おろす構図のため、顔も表情も浮かぐことができない。この女性を普通に肖像画として描けばこうなるであろうという人物画が「画中画」として正面に据えられ



no. 5 庭と少女
1948 (昭和23)
佐賀県立美術館



no. 6 画室
1949 (昭和24)
佐賀県立美術館

ているのが、次の《画室》(no. 6)である。

まさに佐賀大学が発足した1949(昭和24)年の大潮展出品作だが、この《画室》もきわめて不思議な絵である。最も大きく描かれているのは左下にある蟹牡丹文の緞通で、壁には幾つもとりはずされた額縁がたてかけられている。右端で半身を断ち切られた画家の視線が導く画面の中央には描きかけの絵があるきりで、室内にいるべき、描かれている人物は不在である。この室内を見ているのは誰なのか。描いているはずの画家が画中に描かれ、情景を見ている別の視線の持ち主の存在が暗示されている。

同じ年の日展に出したのが《傘を乾す画室》(fig. 6)。ここにも「画中画」という形で女性像が描かれている。非常にトリッキーな作品で、襖や梁に幾重にも遮られた空間の奥へ奥へと分け入って、ようやく辿り着く先がまた絵の中という構図で、描かれている人物までの心理的距離が極めて遠い。猫だけが自在に画面の内外を行き来している。

翌1950(昭和25)年の東光会出品作が、子供を描いた3点《晴衣を着るK子》(fig. 7)《椅子に凭るA子》(fig. 8)《子供と紙風船》である。あどけない少女たちに手を引かれるように、同じ空間には画家=父の気配も漂う。ようやく室内に人物が帰ってきた。

同じ年の日展出品作が《白い服の少女》(no. 7)。《画室》で左下に描かれていた緞通のような敷物が、ここでは床一面に広がり、籐椅子には身を傾けた女性。描く者と描かれる者が同じ空間に存在するという、日常の延長のような室内風景が戻ってきている。ただ、まだ上から見下ろす構図である。この視線を向けるためには、画家は宙に浮かねばならない。

次の年、1951(昭和26)年の東光展に《画室にて》(no. 8)を出品。相変わらず空の額やイーゼルに架けられた画中画が見られるが、アトリエの中央の椅子に座り本を読む女性の姿を、完全とは言えないが、ほぼ正面から見つめる構図になっている。人を包み、温かく、時に幸福や女性そのものを象徴することもある室内。そこに、ブランクと同じほどの時間をかけてゆっくりと人物が戻り、静かに降下して地に足をつけようとしている感覚がある。

この流れの先に、代表作《画家の家族》(no. 9)が生まれるのである。

夫人をとりまく3人の娘。緑が支配する画面に散らされた女性4人の衣服の配色と、奇妙に危ういポーズのバランス。何かしらぶつかり

そうな波乱に満ちた取り合わせの形態と色彩が、長女の頭部を頂点とする構図に収斂している。あと一滴の水も落とせない、表面張力のような画面である。

制作に際して母と娘たちは実際にポーズをとった。自宅で撮影した写真が残されている(fig. 9)。石本は姿勢について細かく指示を出したという。「箱の上にならずと爪先立ちしてはならず大変でした」と右端に描かれている次女の方が、作品を前に回想された¹⁶。その箱は画中には描かれず、他にも写真と作品では異なる点が少なくない。変更した部分こそ作品としての急所であろう。彼女たちの前に立ち、陰影を最小限に抑えながら平面に息を吹き込もうとした画家の格闘が伝わってくる。この部屋には、確かに5人いたのだ。

展示室では、佐賀大学に「特美」がスタートした時期の作品が続く。1952(昭和27)年の授業風景《裸婦を描く》(no. 10、同タイトル2点A・Bの内のA)と翌年の《画学生の像》(no. 11)は、いずれも東光展(18・19回)の出品作。

このコーナーには、「特美」に関連する写真や資料等も合わせて展示した。当時の学生の方々から、古い写真(fig. 10)を指差しながら「これはあの人」「いや、誰々」等の貴重な話を伺った。新たな写真資料を提供される方、《画学生の像》について「これは女子学生なんだよ」という証言(真偽は不明)など、文献・資料からだけでは得難い当時の「息づかい」のようなものを頂いた。

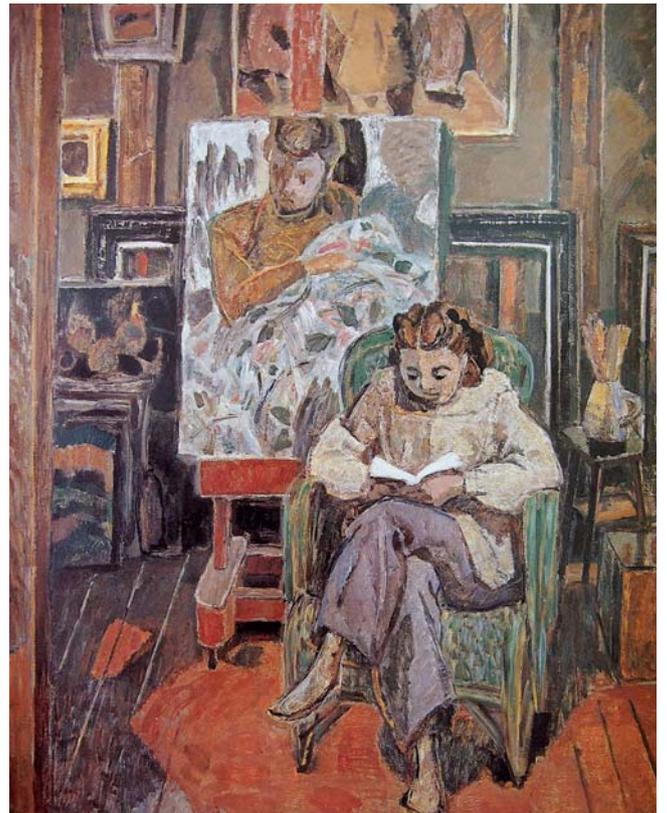
1953(昭和28)年の日展出品作《晩夏》(no. 12)には、後に展開する人物画の予兆がすでに見られる。1960年代前半の実験的ですらある、とことん人間の身体表現と向き合う群である。今回の展示では26回と28回の東光展出品作《オーバーの女》(no. 13)、《女二人》(no. 14)を紹介した。

その後、欧州風景や臼杵石仏など風景画の時代が始まるが¹⁷、還暦の頃、つかの間人物に戻った時期の作例として1968(昭和43)年の《K子座像》(no. 15)、翌年の《初秋の女》(no. 16)を展示した。この改組第1回日展に出品した《初秋の女》が、発表された人物画の最後である。

強い影響力とエネルギーで「帝王」とまで呼ばれた石本秀雄。複数の作品を貫いて流れる、家族を描くときの温かいまなざし。同時に、果敢と言ってもよい、対比的に置かれたメリハリのきいた色彩や、対象の均衡を崩すことも厭わない構図上の試み。その人生にも似た両義性とバランスを、没後30年を経た今日なお取り組むべき謎として展覧



no. 7 白い服の少女
1950 (昭和25)
佐賀大学

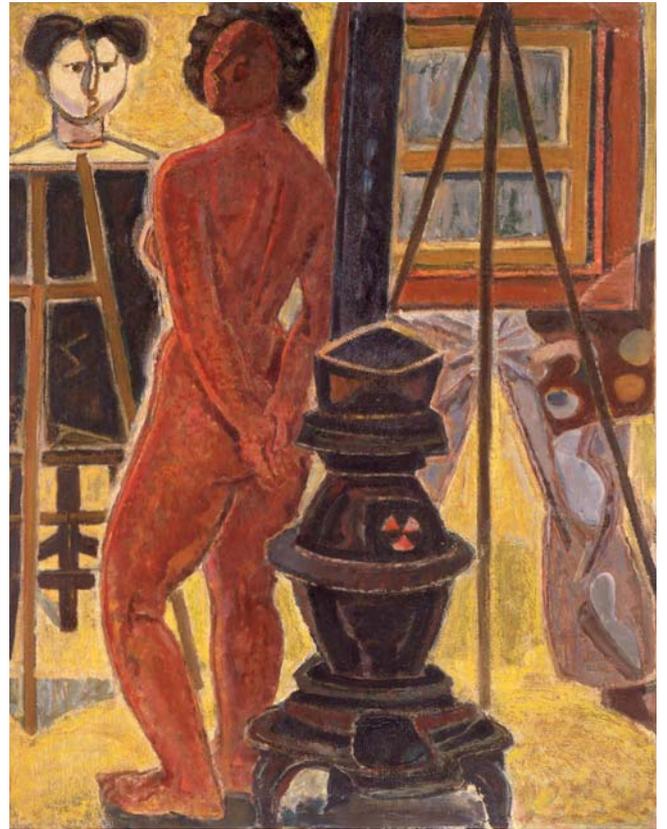


no. 8 画室にて
1951 (昭和26)
佐賀大学 (佐賀県立美術館寄託中)



no. 9 画家の家族
1951 (昭和26)
佐賀県立美術館

no. 10 裸婦を描く
1952 (昭和27)
佐賀県立美術館



no. 11 画学生の像
1953 (昭和28)
佐賀県立美術館

会の場で問いかけた。

3. 1949—1951：美術教育の理念

《画家の家族》(1951)は日展で特選となり朝倉賞を受けた。石本が画家としての成熟期を迎えようとしていたこの時、佐賀では教育現場も、地方画壇も大きく動いていた。

旧制佐賀高校と3つの師範学校を母体に、佐賀大学が発足したのは1949(昭和24)年4月。石本の作品でいえば、画中画を中心に据えた《画室》《傘を乾す画室》を発表した年である。大学には文理学部と教育学部の2学部があり、図画の教室が属した教育学部は師範学校の建物をそのまま校舎としたため、小城から佐賀の城内地区に通う生活パターンに大きな変化はなかった。だが、同年5月早々、納富進、久富邦夫、立石春美らと後に「県展」へと展開する団体「西虹会」(fig. 11)を組織するなど、何かしらの変化、新しい気運を志向する意識が充満していたことがうかがえる。

1951(昭和26)年11月に「佐賀県展」が始まると、「西虹会」は当初の目的を達したとしてやがて発展解消したという⁵。戦後、瞬間的な光芒を見せる団体は各地に多くあっただろうが、保守でも革新でもなく、大きな発表の場のための呼び水となり、それを見届けて静かに幕を引くというのは、この時期の美術運動としては余りにも端正に思われる。

「県展」をスタートさせたのが1951年。《画家の家族》の発表の年である。作家としての中央画壇での評価と、地方の画壇を活性化させる試みを両輪で追求している。さらに、教員としては新制佐賀大学発足早々に「特設美術科」の開設準備が表面化しようとする目まぐるしい時期であった。それぞれを別のベクトルを持った活動だとすると無謀なほどの仕事量だが、3方向にみえる動きが連動していたのだとすれば、それらは理にかなう。たとえば、戦後すぐの日展への出品にしても、個人としての中央画壇への志向という側面の他に、続く後進へのルート作り、それ以上に、保守本流に対峙し挑戦し続ける自己の姿勢そのものが、地方全体の、あるいは学生たちの今後に影響するという、何か使命感にも似た側面があったのではないだろうか。

「西虹会」から「県展」へと展開させる動きにも同様の意思を見ることは可能である。「県展」第1回展の審査員に高い人材を求めて、「日展」系とは対極の「独立」の海老原喜之助を熊本に訪ね、大学の講師を委嘱するなど、学生たちと多様な美術潮流とのリエゾンに努

めたことはよく知られ、後に石本自身も回想している⁶。一連の動きを見ると「県展」に向けての活動も、自分たちのためというにとどまらず、より若い人たちの発表の場、一種の登竜門を作る意図があったと考えられる。なぜなら、佐賀にはすでに総合美術の公募展として「県美術協会展」があり、石本ら「西虹会」の主力メンバーは中央画壇の他に、地域にも確実な発表の場をすでに持っていたからである。「西虹会」から「県展」へという流れには、むしろ続く世代のために、伝統ゆえにやや敷居も高かった「美協展」に次ぐ新たな公募展を期待したのではないだろうか。郷土誌「明」昭和24年8月号に、「西虹会」第1回展を終えての座談会の様子が掲載されている。石本の発言⁷。

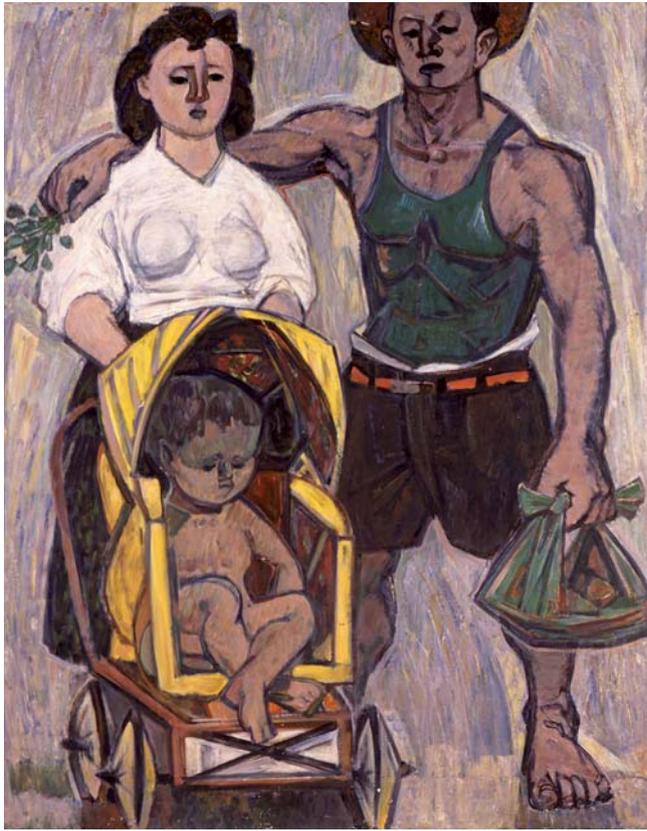
石本 (前略) 西虹会の出品者は各畫會に自由に出品して差支えありません。むしろ各畫會に十分進出なさるように私どもとしても骨折りたいと思います。佐賀の美術協會にも出品して下さい。佐賀美術協會はいわば佐賀の郷土を背景とした縣展とでも言うべき傳統あるものであります。西虹會は必ずしも佐賀縣内のみの出品を受けるものではありません。廣く他府縣よりも出品を待っています。今回も佐世保、福岡等の出品が澤山ありました。

山口(孝) どんな階層、職場の人が多いようですか。

石本 學校の教職員が多いです。その他の職場も色々あります。最もうれしいことは出品者の年が若いことです。(以下略)

若い人たち、それも県内だけではなく周辺圏域まで含めて、学校の先生も多く参加するということは、すなわち、佐賀大学教育学部で美術を学ぶ在校生から卒業生までが対象者として重なってくる。今で言うステークホルダーを強く意識した発言と思われる。このような姿勢に照らすと、画家としての自身の中央画壇への挑戦も、地方画壇における戦後の活動も、「後身の育成」という教育者としての責任感と分かちがたく結びついていたと考えられる⁸。

「石本秀雄のアトリエ」展では、石本家の自宅玄関を再現するという趣向で、かつて実際に訪れる知人や学生たちを迎えていた「衝立」と素描《パリのモデル》(no. 17)を展示するコーナーを設けた。衝立は、棟方志功の風呂敷(印刷)を枠に貼ったものだが、主眼は周縁部である。布の周囲の余白部分に描かれている薔薇が石本秀



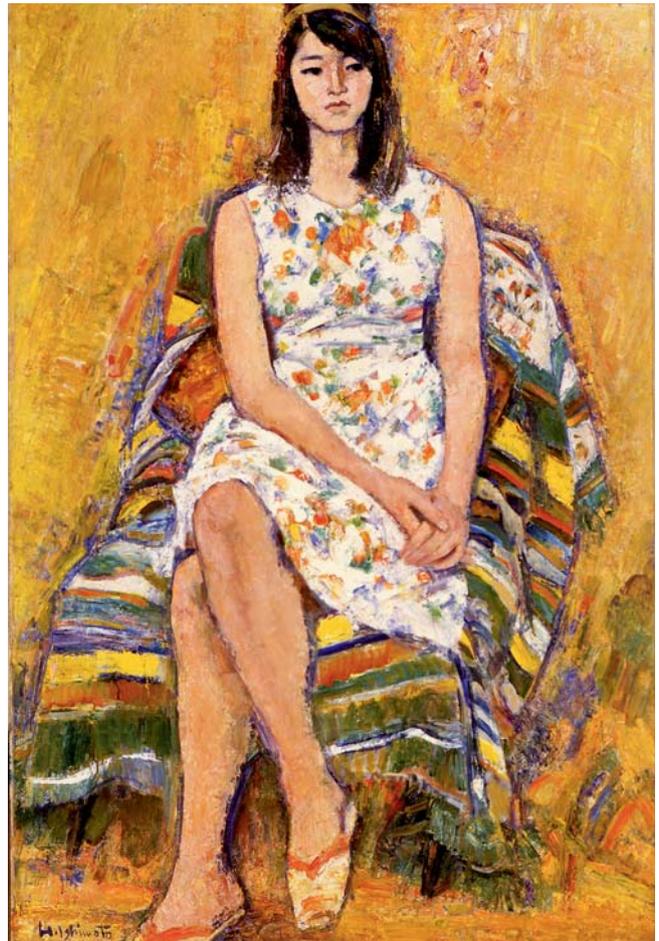
no. 12 晩夏
1953 (昭和28)
佐賀県立美術館



no. 13 オーバーの女
1960 (昭和35)
岡田家



no. 14 女二人
1962 (昭和37)
佐賀県立美術館



no. 15 K子座像
1968 (昭和43)
佐賀県立美術館



no. 16 初秋の女
1969 (昭和44)
岡田家



no. 17 パリのモデル
1964 (昭和39) 頃
岡田家

雄の筆で、そしてフレームは佐賀大学で金工を教えていた中牟田佳彰の作。合作である (p.8 参照)。

この衝立をはじめ、素描や原稿、パスポートに至るまで貴重な資料の数々をお借りできる状況でありながら、この時点では展示用ケースが足りず、僅かしか並べられなかったのが心残りである。中でも、美術史の授業のために準備したという自筆のノートの書き込みの細かさは驚嘆すべきものであった。

「特美」開設当初は自ら「西洋美術史」の授業を担当したとい、ノートに隙間なく描きこまれた鉛筆の跡は、その取り組みの真剣さを証立している。画家本人は自らを「セザンニアン」と称していたが、セザンヌに関する書き込みが必ずしも多いわけではなく、また、残された作品からもマティスやボナール、ブラックら、近代絵画の巨匠らへの明瞭なリスペクトを見ることができると合わせて考えると興味深い¹⁴。実際にヨーロッパに行く1964 (昭和39)年以前は、図版・写真の情報が頼りだったはずで、その状況下で貪欲に行われた西洋美術受容は画家を理解する上で重要な切り口のの一つと考えている。戦後、東京や倉敷等で開催された海外近代美術の巨匠展も一つのきっかけではあっただろうが、「裸婦を描く」(1952)と「ブラック」展(1952年9月)などはタイミングが合っているが、たとえば、マティスに関しては1951年5月の「マティス」展以前から広範で詳細な影響関係が見られるし、ボナールにいたっては国内での大きな展覧会は1968年を待たねばならない。

石本には、西洋美術からの学びが自身の画業展開に必要なだったにとどまらず、意識的か無意識的かは別として、優れた古今東西の成果を「自分の筆と作品を介して顕現させようとした」どころか、西洋美術を受容し作品に取り込もうとする過程さえも生きた教材として若い人たちに示そうとしていたのではないだろうか。

結語

佐賀大学美術館の「石本秀雄のアトリエ」展では、制作に教育にと精力的な活動を展開していた時期を中心に、人物のいる室内画の流れを辿った。そこから見えてきたのは画家としての業績と並行する、後身育成のための広範な視座である。

冒頭で作家と教育者の「2足のわらじ」という常套句を使ったが、石本の場合、作家としては個人の画業の探求と、地方画壇に新たな局面を開く推進的役割を同時に担っており、地域の美術教育への貢

献と合わせると、むしろ「3足」というのが正確かもしれない。圧倒的な活動家というイメージの下には、それら3つの志向を相互に関連させ、相乗効果を生むことのできた画家・石本の力量があった。その使命感の本質を理解することは戦後佐賀の美術史を理解するための一つの鍵となろう。本稿は展示された作品と関係資料に基づき、前半は作家としての、また後半は教育者としての石本を軸に考察した。

¹ 佐賀大学教育学部特別教科教員(美術・工芸)養成課程。地元や関係者間では「特設美術科」、さらに「特美」の呼称が浸透・定着している。佐賀に限らず、山形大学の「特音」の事例など、戦後、地方において芸術的専門性の高い公教育を提供すると同時に新人教師を継続的に育成した特別教科教員養成課程の意義は再度確認されてしかるべきである。佐賀大学の「特美」から現在の文化教育学部美術・工芸課程への経緯については中牟田佳彰「佐賀大学教育学部美術・工芸科(特設美術科)小史」(『美術・工芸教育』第1号、1993年)及びそれを補足加筆した前村晃「佐賀大学における美術・工芸教室の変遷-〈特美〉の設置から今日まで-」(「佐賀大学開館記念展:美術・工芸教室60年の軌跡I-〈特美〉の育成者たち」展図録、2013年、69-77頁)に詳しい。

² 「小城を愛した画家 石本秀雄展」小城市立中林梧竹記念館、2014年3月1日-16日。

³ 作品の選定と配置に関しては、1952年夏の小城桜岡小学校における個展のゆるやかな再構成を意識し、当時の写真 (fig. 12) も合わせて展示室で紹介した。

⁴ 石本秀雄の履歴その他の多くを次の図録に負っている。1)「石本秀雄展」佐賀県立博物館、1974年。佐賀大学の退官記念展として開催。主催は県立博物館と実行委員会、実行委員会は佐賀県造形教育研究会、佐賀大学美術科同窓生により構成。2)「石本秀雄展」佐賀県立美術館、1987年。画家没後県立美術館に寄贈された作品を中心に企画構成された大規模な回顧展の図録。初期から絶筆まで、さらには展示されない作品の図版まで網羅し、現在まで石本秀雄の画業を辿る際の必携である。

⁵ 家族のための記念画的性格を持つ作品として、1968年の《娘の婚礼》がある。

⁶ 例外に1941年の《病床》がある。ただし、水枕をして苦しげに眠る子どもの姿で、いわゆる室内人物像とは系統が異なる。

⁷ 次女、岡田章子さんによる回想。画家の創作法の一部を示す貴重な資料として、この写真の公開を許可いただいた。

⁸ 松本誠一氏は昭和39年から翌年にかけての3ヶ月間のヨーロッパ滞在を風景画への転換の契機としている。松本誠一「〈酔歌〉によせて(石本秀雄論)」、図録「石本秀雄展」佐賀県立美術館、1987、149頁。

⁹ 「西虹会」の第1回展は1949 (昭和)年6月5日から1週間、玉屋百貨店で行われた。「県展」の第1回展は1951 (昭和26)年11月23日から29日まで、玉屋4階を第1会場、市公会堂を第2会場に佐賀県と佐賀県教育委員会の主催で開催された。なお、佐賀県展の成立や地域の作家については佐賀県立美術館の野中耕介氏から様々な教示いただいた。

¹⁰ 石本秀雄「海老原先生と佐賀」、雑誌「繪」1971 (昭和46)年7月号、24-25頁。

¹¹ 「画壇新人の集い/西虹美術展会員」、雑誌「明」1949 (昭和24)年8月号、35-36頁。出席者氏名が36頁に列記。会場となった中央公民館の河島総務部長を含め35名。発言が採られているのは石本の他、久富邦夫、立石春美ら8名。質問者の「山口(孝)」は洋画家の山口孝行。

¹² もう一つ、「県展」発足の翌1952 (昭和27)年から「佐賀県造形教育研究会」の初代会長として佐賀大学の退官までその任にあったことを傍証として付け加える。

¹³ 今回の展示作品に見られるマティス、ボナールらのモチーフの引用については本展の後に以下で発表。佐々木「石本秀雄の西洋美術受容について」平成26年7月5日、九州藝術学会。

——「石本秀雄のアトリエ」展の開催は、画家のご遺族及び佐賀県立美術館からの多数の展示資料の貸与により可能となりました。

特に画家の次女である岡田章子さんと岡田直之さんご夫妻からは展示のみならず本稿についても惜しめない協力と助言をいただきました。本展で紹介した岡田家蔵《自画像》《オーバーの女》《パリのモデル》については展覧会後に他の作品・資料とともに佐賀大学にご寄贈頂いたことを付言し（pp. 40-41参照）、改めて深謝いたします。

画像提供

fig. 2, 9, 10, 11, 12: 岡田家

fig. 3: 加須市教育委員会

no. 2, 3, 4, 5, 6, 9, 10, 11, 12, 14, 15, fig. 4, 6, 8: 佐賀県立美術館

fig. 7: 長崎県美術館



fig. 1 校庭の春
1934 (昭和9)
佐賀県立小城高等学校



fig. 2 《藤椅子に凭る女》と石本秀雄



fig. 3 斎藤与里《K子像》
1937 (昭和12)
加須市教育委員会

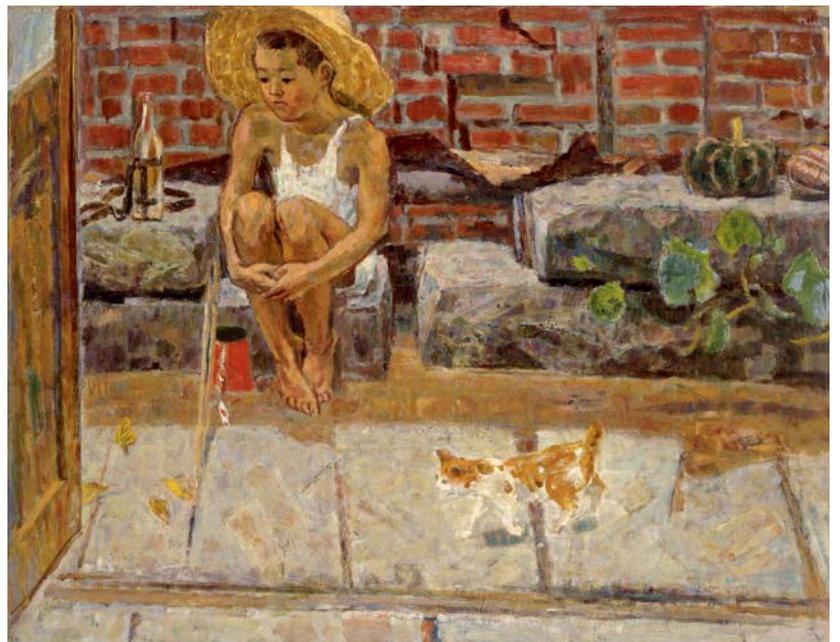


fig. 4 少年の頃
1947 (昭和22)
佐賀県立美術館

fig. 6 傘を乾す画室
1949 (昭和24)
佐賀県立美術館



fig. 5 子猫と女
1948 (昭和23)
現在所在不明
図録「石本秀雄展」佐賀県立美術館(1987)
169頁より転載

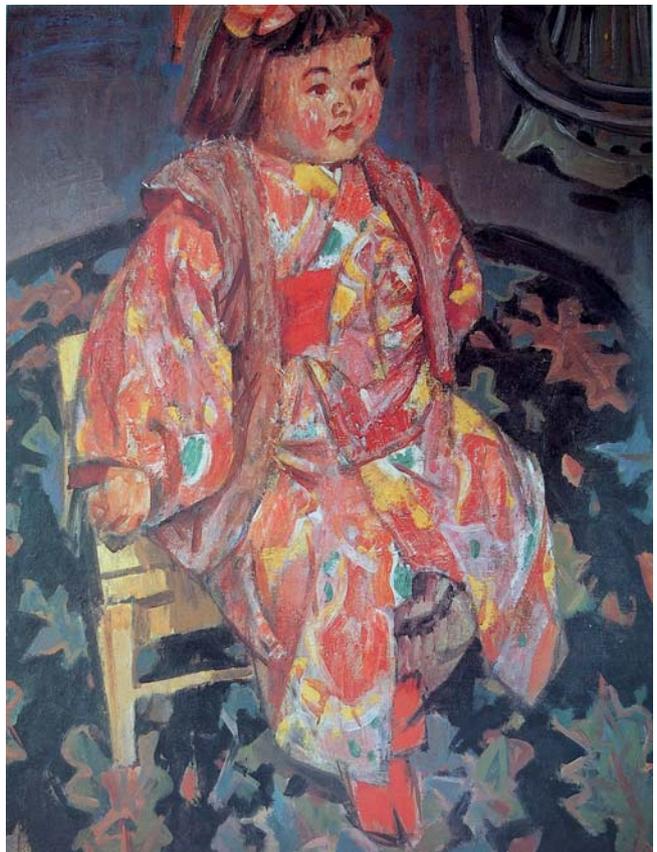


fig. 7 晴衣を着るK子
1950 (昭和25)
長崎県立美術館

fig. 9 《画家の家族》のための写真



fig. 8 椅子に凭るA子
1950 (昭和25)
佐賀県立美術館

fig. 10 「特美」創設時の教員と佐賀大学一期生を含む学生たち



前列左から2人目が城秀男。順に緒方敏雄、筒井茂雄、久富邦夫、石本秀雄。石本に並んで昭和24年入学組の古賀和夫、井手誠二郎、吉田昭彦。後方に古川末由、大久保孝夫、古賀義治、成富保武らの顔も見える。右上方、壁に掛けられているのは中西利雄の水彩画 (p. 17参照)。

fig. 11 「西虹会」設立メンバー。中央が石本秀雄。

左から立石春美、筒井茂雄、石本の右が納富進、久富邦夫。





fig. 12 小城桜岡小学校での個展 1952 (昭和27)



佐賀大学美術館

平成26年度

年報＋紀要



2016年3月25日発行

発行 佐賀大学美術館 ©2016

佐賀市本庄町1番地

企画・編集 佐々木奈美子＋大坪由季 (佐賀大学美術館)

編集協力 井手麻奈未＋鬼塚美津子＋藤森梨衣 (佐賀大学美術館)

印刷 株式会社 昭和堂

※本書の仕様は、「平成25年度年報＋紀要」(デザイン:佐賀大学文化教育学部 荒木博申教授)を踏襲した。

佐賀大学美術館



THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM